のび太vsドラえもん

ドイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
のび太ｖｓドラえもん

【Ｎコード】
Ｎ４２４２Ｉ

【作者名】
ドイル

【あらすじ】
「ドラえもん・・・君といたときは楽しかったよ。・・・どうしてこんな事になったんだよ、ドラえもん・・・」
二人の悲しい対決が今、始まる。

プロローグ

「ドラえもん・・・君といた時は楽しかったよ。僕が困った時には、いつも助けてくれたよね。ときにはケンカしたこともあったけど、すぐに仲直りしたよね。だけど・・・どうして、どうしてこんな事になったんだよ、ドラえもん・・・」

＜一週間前＞

「ドラえも～ん」と言いながらのび太は階段かけあがった。２階のふすまを開けるとドラえもんは、たたみの上に座っていた。今思うと、ドラえもんはその時少し寂しそうな顔をしていた。しかしのび太はまったく気がつかなかった。

「実はさ、昨日スネ夫が新しいロボットを買ったんだって。それがとてもすごいんだ。ねえ～僕もロボットがほしいよ。」

「まったく・・・君にはこの僕という、とても素晴らしいロボットがいるだろ、僕の方がスネ夫のロボットよりせいのうがいいんだぞ。」と、あきれながらドラえもんは言った。

「そんなこといったってぇ・・・」のび太はまだあきらめきれない顔をした。

「それとね、僕、定期検診をするために、一度２２世紀に帰らなくちゃならないんだ。でものび太君が少し心配で・・・今日か明日には戻って来れると思うから・・・」と心配そうな顔をして言った。

「心配するなよ、大丈夫だからさ。安心していっておいで。」本当は少し不安だったが、今日、明日ぐらいならなんとかなるだろうと思い、笑顔で言った。

「そう？・・・それじゃあ行って来るよ。」と、のび太の机の引き出しを開けた。

「なるべく早く戻るよ。」と言い、引き出しの中に入っていった。

これがドラえもんとの最後のまともな会話になろうとは・・・・こ

の時ののび太には知る由もなかった。

第一話　「ドラえもんの異常」

ドラえもんは２２世紀に帰ると早速ロボット病院へ向かった。
ロボット病院に着くと、受付ロボットにたずねた。
「あの、定期検診の予約をした、ドラえもんなんですけど・・・」
「ドラエモン様デスネ、少々オ待チクダサイ・・・・オ待タセシマシタ、１１０９号室へドウゾ。」
１１０９号室に行くと、機械を操作していた医者ロボットがこちらに気が付いた。
「ヤーードラエモン様デスネ。コチラヘドウゾ。」
１１０９号室は、少し大きい部屋で、ベットが置いてあった。
ドラえもんはそのベットに横たわった。
「今カラ、コノパソコン二接続シテ、アナタノ体ノ状態ヲ調ベマス。」
と言いながら、医者ロボットは、パソコンを操作した。
この時、このパソコンにあるものが仕組まれていたことに、医者ロボットは気が付かなかった。
ドラえもんの意識はだんだん遠くなっていった。
＜　ー３０分後ー　＞
『ピーーーーーッ』

パソコンの電子音がなった。

「ハイ、終ワリマシタヨ。結果ハ異常ナシデス。オツカレサマデシタ。」

ドラえもんは起き上がり、
「ありがとうございました。」
と言い、ロボット病院を後にした。
「早く21世紀に戻らなきゃ。」
ドラえもんはつぶやいた。

公園を走っていたら、突然視界が大きく揺れた。
「あ、あれ？め、めまいが・・・おかしいな、異常はな、なかったハズ・・」
ここでドラえもんの意識が途切れた

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

のび太は心配していた。
ドラえもんが22世紀に帰ってから3日が過ぎていた。
「昨日には帰るといっていたのに・・・」
ドラえもんが予定より遅く帰ってくる、ということは、ほとんどない。
そして、そういう時には、だいたいロクでもないことが起こる。

そう考えているうちに、だんだん悪い予感がしてきた。
「ま、まさか、定期検診で何か見つかったんじゃ・・・」
そう考えると、いてもたってもいられなくなった。

学校が終わると、すぐに家に帰った。
２階にかけあがり、ふすまを開けたが、ドラえもんはまだ戻っていなかった。
「やっぱり・・・変だ！」
とのび太は思い、２２世紀に行こうとしたが、タイムマシンが無いのを思い出した。
「どうしよう・・・このままじゃ・・あ、そうだ！スペアポケットがあった。」

押入れを探したら、スペアポケットを見つけた。
「まず、『タイムテレビ』で、ドラミちゃんにドラえもんの事を聞こう。」
早速、タイムテレビを取り出し、ドラミにつないだ。
すると、ドラミが出てきた。

「ドラミちゃん！」
「その声・・・のび太さん！？」
「ドラミちゃん、ドラえもんはどうしたの？まだ帰ってこないんだ！すぐ帰るといったのに・・・」
「・・・・・」

なぜかドラミは黙っていた。
そのことがいっそう、のび太を不安に駆り立てた。

「ドラえもんはどうしたの？　ねぇ、ドラミちゃん、教えてよ！」
するとドラミは、徐(おもむろ)に口を開いた。
「・・・落ち着いて聞いて、実は・・・・お兄ちゃんが消えちゃったの！」
「え！？　ドラえもんが消えた！？」

のび太の悪い予感が当たった瞬間であった。

第一話　「ドラえもんの異常」　（後書き）

ドイルです。これからもよろしくお願いします。
え～と、話が少しシリアスなので、ここでは、話に出ているゲストを呼んで、いろいろ話そうと思います。〔ときどき〕
それでは、今回のゲストは、医者ロボットです。
医者「ヤードウモドウモ。」
ドイル「なんで、記念すべき第一回目のゲストがおまえなんだよ・・・」
医者「マーイイジャナイデスカ。」
ドイル「それに、この『のびｖｓドラ』、元々の原因はお前のような気がするんだが・・・」
医者「〔ギクッ！〕・・・ソ、ソンナ事ナイヨ・・・」
ドイル「ホントか～？それにお前、セリフが漢字以外、カタカナって、なんか書きにくいんだよね。多分読者も読みにくいと思うんだよ、何とかならないの？それ・・・」
医者「アナタガソウシタンデショーガ！」
ドイル「ホラ、今のも読みにくい・・・・少しでも古い感じを出そうと思ったのに・・・まぁいいや、次からもう出てこないと思うし。」
医者「エ～～ナンデ？」
ドイル「いや、だって、その『医者ロボット』っていう名前、イマイチだし、書きにくいし・・・」
医者「アナタガソウシタンデショーガ！」

第二話　「ウイルス感染」

「え！？ドラえもんが消えた！？」
のび太は信じられずにいた。
悪い予感はしていたが、「まさか、そんなことはないだろう。」と心の中では思っていた。
いや、そう信じたかった。
しかし、本当にそんなことになるなんて・・・

「それって、誘拐ってこと？」
「それは、まだわからないの・・・今、タイムパトロールも探しているけど、ロボット病院を出てからの足取りがまったくつかめないの。お兄ちゃんのタイムマシンもここにあるから、２２世紀には、いると思うんだけど・・・」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

夜、のび太は眠れなかった。
もう１２時になっていた。
「早く寝なきゃ、明日また寝坊しちゃう。」
そうつぶやき、寝ようとしたが、眠れなかった。

ドラえもんはまだ帰ってきていない。
ドラミちゃんから、「何か分かったらこちらから連絡します。」といわれ、タイムテレビの電源を切った。
スペアポケットからドラえもんのポケットへ行こうともしたが、ド

ラミちゃんに「いくら四次元空間でも、そちらから22世紀までは移動することはできない。」と言われ、
とりあえず、ドラミちゃんからの連絡を待つことにした。

「明日、ジャイアンたちにも相談しよう。」
と、考えていると、いつの間にか寝てしまった。

＜翌朝＞
のび太は目を覚まし、時計を見た。
7時50分・・・登校完了が8時までだから・・・完璧な遅刻だ。
「やばい！寝坊した！」
とさけんで、あわてて服を着替えて、階段を下りていった。
「ドラえもんがいてくれたら・・・・」
ふいに、ドラえもんのことを思い出した。
「どこへ行ったんだよ、ドラえもん・・・」

1階に下りると、のび太のママ、野比玉子が料理をしていた。
ぼくはすかさず、
「なんで起こしてくれなかったんだよ。」
と、文句を言ったが、
「ちゃんと何回も起こしました！」
と、反論するので、これ以上文句を言っても仕方ないので、諦めて少しでも早く学校に行くことにした。

結局、学校に遅刻して、先生に怒られてしまった。

＜休み時間＞
ジャイアン、スネ夫、静香ちゃんの三人を呼んで、昨日のことをす

べて話した。
三人とも、かなり驚いていた。
「そ、そんな・・ドラちゃん・・大丈夫かしら・・」
「大丈夫だ、ドラえもんなら、早速２２世紀に行って、犯人をぶっとばしてやろーじゃんか！」
「ちょ、ちょっと待ってよ、ジャイアン、危険だよ。それに、まだ誘拐と決まった訳じゃないんだろ、のび太。」
「そ、そうだけど・・・」

心配する静香ちゃん、助けようと言い出すジャイアンに、それを止めようとするスネ夫。
予想したとおりの反応だった。

とりあえず、学校が終わったら、のび太の家に集まり話し合う。ということにした。

＜４時１５分＞
学校が終わった。
そして僕らは全員でのび太の家に向かった。
家に着くと、早速階段を上り、ふすまを開けた。すると・・・
「な、なんだこりゃぁ！」
全員で叫んだ。

のび太の部屋はあらされていた。しかもただごとではない感じだった。
押入れのふすまはやぶれ、本は散乱し、窓は割れていた。
それよりものび太には驚いたことがあった。
「引き出しが開いている・・・」
そうつぶやきながら、机の引き出しをのぞいた。
そこにはタイムマシンが置いてあった。

「どういうことだよのび太！」
ジャイアンがのび太に聞いてきた。
のび太にもわけが分からず混乱していた。
なぜ部屋があらされているのか？しかしのび太には１つだけ分かったことがある。
ドラえもんが・・・帰ってきた！

「とりあえず、ドラえもんを探しに行こう！」
ジャイアンのこの提案に僕と静香ちゃんは賛成したがスネ夫は少し考えて、皆が疑問に思っていたことを言い出した。
「ちょっと待って、おかしくないか？なんでこんなに部屋があらされているんだ？ドラえもんだったらこんなことはしないはずだよ。もしかしたら犯人かもしれない。一応、タイムテレビでドラミちゃんに確認したら？」

スネ夫の言うことはもっともだったので、スペアポケットからタイムテレビを取り出し、ドラミにつないだ。
つながった映像を見て、皆は驚愕した。
ドラミちゃんがぼろぼろで倒れていたのだ。どう見てもただごとではない。

「大変だ！２２世紀へ行こう！」
僕はあわてて叫んだ。
「ちょっと待ってよ、危険だよ。」
とスネ夫は止めようとしたが、
「うるせぇ！お前は来なくていい！」
と、ジャイアンが叫び、結局みんなで行くことになった。

このときのび太はスペアポケットを部屋に置き忘れてしまった。

しかしのび太はまったく気が付かなかった。

タイムマシンで22世紀のセワシの部屋に着いた。
セワシの部屋もあらされていた。ただ、のび太の部屋よりひどかった。
真ん中にドラミちゃんが倒れていた。近くにセワシも倒れていた。
「ドラミちゃん、セワシ君！」
僕たちはすぐに二人のもとへと駆け寄った。

「の、のび太さん・・・セワシさんは大丈夫？」
ドラミちゃんが気がついた。
「大丈夫よ、気絶しているだけだわ。」
僕の代わりに、静香ちゃんが答えた。
「そう・・・」
ドラミちゃんは安心しているようだった。

「いったい、どうしたの？誰がこんな事を・・・」
僕は聞いた。
「それが・・・お兄ちゃんよ。お兄ちゃんがやったの！」
「え！？ド、ドラえもんが？」
僕たちはとても信じられなかった。ドラミちゃんは続けた。
「聞いて・・・実は今日、とんでもないことがわかったの。お兄ちゃんが定期検診を受けた病院のパソコンがウイルスを持っていたの！」

「ウ、ウイルスって・・・インフルエンザのようなもの？」
「ちがうよのび太、ここで言うウイルスは、コンピューターヤシステム、データを破壊する、悪意を持って作られたプログラムのことだよ。たしか、ネットワークなんかを通じて病気のように広がっていくんだ。」

よく分からない僕にスネ夫が説明した。
「それで、どんなウイルスだったの？」
静香ちゃんの質問に、ドラミちゃんはうつむきながら答えた。

「そ、それは・・２２世紀で最も恐れられている、ｊウイルスというウイルスよ。　製作者は不明で、それにロボットがかかると、感情が消えて、凶暴性が増し、さらにそのロボットの体も、数倍も強力になるわ・・・つまり、完全な殺戮（さつりく）兵器になるの！」

「殺戮兵器・・・」
のび太にはそうつぶやくことしかできなかった。
「それで・・・助ける方法はねぇのかよ！」
ジャイアンは叫んだ

「・・・3日よ・・感染して3日までなら、タイムパトロールからもらったワクチンプログラムで何とかなるかもしれないわ・・・でも、3日が過ぎれば・・・方法は一つしかなくなるわ。」
「なに？」
「壊すしかないわ。」

第二話　「ウイルス感染」（後書き）

ウイルスの情報はｇｏｏ参照。

第三話　「10年後」

「ド、ドラえもんを・・・壊す！？」
のび太は叫ばずにはいられなかった。
「・・・3日たてば、ワクチンでの回復は絶望的にな、なるわ。だからそれまでに、お、お兄ちゃんを止め・・テ・・」

ここでドラミちゃんの声が途切れた。
「ドラミちゃん！」
のびたがドラミちゃんに駆け寄った。
静香ちゃんがドラミちゃんの様子を調べた。
「大丈夫よ、のびたさん。気絶しているだけだわ。」
一応安心した。

「それでこれからどうするよ。」
ジャイアンがみんなに聞いた。
みんな、一瞬黙り込んでしまった。

「ドラえもんは、いつも僕らが困っている時には助けてくれたじゃないか、今度は僕らがドラえもんを助けるよう！」
僕が、勇気を出して言った。
「えらい！よく言ったのび太。」
ジャイアンが僕の肩を叩いた。
「そうよね。ドラちゃんを助けなきゃ。」
静香ちゃんも賛成した。
「放っておいたら、僕も危ないんだよな・・・仕方がない、やるしかないか。」
スネ夫も珍しく賛成した。

「よし！ドラえもんを探しに、２１世紀へ戻ろう！」
ジャイアンが他のみんなに呼びかけた。

僕は心の中でつぶやいた。
「待っててね、ドラえもん・・・」

しかし僕たちは気が付かなかった
ドラえもんは２１世紀の町を破壊しだすことによって、起きてしまうであろう事を・・・
いや、もし、気が付いていたとしても、僕たちは何もできなかったかもしれない。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊

僕たちはタイムマシンの時空間の中にいた。
僕らが未来へ出かけた時にもどり、ドラえもんを止める。
これが僕らの願いだった。

時空間に突然、バチバチと、火花を鳴らし始めた。
おかしい、今までこんな事はなかった。
とみんなが不思議がっていると、
突然、ガクガクと、タイムマシンが揺れだした。それに伴(ともな)って、時空間が乱れ始めた。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
僕たちは一斉に叫び声をあげた。そして、僕たちはパニックになっ

ていた。

「の、のび太！なんとかしろ！！」
ジャイアンが叫んだ。
「そ、そんなこと言ったってぇ・・・」
のび太にはどうすることもできなかった。
いつも、こういう時にはドラえもんがいたから何とかなったのだ。
なので、僕らでは、どうすることもできなかった。

「ぶ、ぶつかる！」
静香ちゃんが叫んだ。
たしかにもう目の前に時空間の壁がせまっていた
僕は目をつぶった。
『ガン！！』
鈍(にぶ)い音が聞こえた。

****

「イ、イテテ・・・」
僕は、焦げ臭いで目を覚ました。
そして他のみんなも目を覚ました。

「ここはどこなんだろう？」
これが目が覚めて全員が思ったことだった。

あたり一面焼け野原になっているところもあり、建っている建物はすべて廃墟(はいきょ)となっていた。

前にも、タイムマシンで他の星に着いたこともあったので、今回は、

さっきの時空間の乱れで、別の星に着いたのだと思った。いや、そう思いたかっただけなのかもしれない。
タイムマシンの表示を見た。
自分たちの今いる場所と、時間が表示されていた。
僕はその表示を見て、愕然(がくぜん)としてしまった。

たしかに、僕らが目指していた時間にはあっていなかった。
しかし、場所はあっていた。
『２０２０．１０．２９　のび太の部屋』
２０２０年、ちょうど１０年後であった。

でも、おかしい・・・前にも１０年後に遊びに行ったことがあった。
しかし、あの時はすごくきれいな町になっていた。
ましてや、こんな焼け野原のようにはなっていなかった。
一体どうして・・・

そう考えているのび太に、一つの最悪な仮説がたてられた。
信じたくはなかったが、こう考えると、すべてのつじつまがあうのだ。間違いない・・・

「未来が・・・変わったんだ・・・」
僕は無意識のうちにつぶやいていた。

第四話　「出木杉中佐」

のび太は考えた。
ここが１０年後の日本の姿であることは分かった。
おそらく、あの時空の乱れも、未来が変わったから起きたものだったのだろう。

この未来を作ったのはおそらくドラえもんだ。
なのでいそいで１０年前に戻り、ドラえもんを止めるべきだろう。

僕はこのことをジャイアンに話して、１０年前に帰ろうとした。

しかし、できなかった。
さっきの時空の乱れで、タイムマシンの時間移動機能が故障してしまったのだった。
ドラえもんなら直せたかもしれないが、僕たちでは、どうにもならなかった。

「そ、そうだ！スペアポケットがあるじゃないか、『タイムフロシキ』があるじゃないか。それで直そう。」
スネ夫が言った。
「そうか！さすがスネ夫。」
のび太はポケットに手を入れた。
すると、のび太の顔は青ざめていった。
「し、しまった・・・スペアポケット、部屋に置いてきた・・・」

「バカヤロウ！！」
ジャイアンはのび太を殴った。

「ご、ごめん・・・」
のび太は心の底から謝った。

「これから、どうする・・・」
ジャイアンはみんなに聞いた。　のび太もどうすればいいか、分からなかった。

「・・・・・」
みんなは黙ったままだった。

無理もないな、のび太は思った。
本当は僕は大声を出して泣きたかった。
しかしそれはできなかった。
僕がしっかりしなきゃ、誰がドラえもんを助けるんだ、と思っていたからだった。
のび太はワクチンプログラムの入った、フロッピーをそっと自分のポケットに入れた。

「あ～もう！ここにずっといても、どうにもならねぇ！！　なあ、一回この周りを探検しねぇか？」
ジャイアンが提案した。
「ちょ、ちょっと待ってよ、ジャイアン・・・あの廃墟を見てよ。ありゃただごとじゃないよ。なにかあったんだよ、うかつに動くのは危険だよ。」
スネ夫は止めようとした。　そのスネ夫をジャイアンは殴った。
「うるせぇ！さっきから聞いてりゃ、危険だ、危険だ、って。　そんなことなんか俺様も分かってる。だけど、おれたちは何度もその

危険に立ち向かっていったじゃねぇか！　安全な道ばかりが、すべて正しい道だとは限らねぇじゃねぇか！」
と言われると、スネ夫は黙って俯いた。

結局、みんなで、あたりを探検することにした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

のび太たちはとりあえず、廃墟の建物があるほうへと向かった。
距離はそんなに遠くなかったのですぐについた。

そこは町になっていた。
ただ、人の気配はせず、すべて廃墟となっていた。
町を探検しているうちに、気づけば町の中心部分まで来ていた。
すると、
「・・・・・だな。」
と、人の声がしたことに静香ちゃんは気づいた。

「ちょっと待ってみんな。静かに・・・ねぇ、かすかだけど、人の声が聞こえるわ。一回隠れて様子を見ましょう。」
静香ちゃんは声をひそめて、みんなに呼びかけた。
静香ちゃんに言われて、僕たちは耳をすませた。
すると、のび太の耳にも確かに話し声が聞こえた。
ジャイアンとスネ夫にも聞こえたらしく、あわてて建物の片隅に隠れた。

人の声はどんどん大きくなっていった。
こちらに近づいてきているらしい。

のび太たちは二手に分かれて隠れた。
建物の片隅には、のび太とジャイアン。
そして反対側に静香ちゃんとスネ夫が隠れている。

二人の人の姿が見えた。
本当ならすぐにその人たちに話しかけるべきだろう。

しかしのび太たちはそうしようとはしなかった。
二人の格好(かっこう)が変だったからだ。

ヘルメットのようなものをかぶり、服装は、水色の服に防弾チョッキのようなものをつけ、ズボンは紺色(こんいろ)をしていた。そして手にはライフルのような銃を持っていた。

どう見ても一般人ではないことは確かだった。

「のび太・・・」
「うん・・・どう見ても普通の人じゃないね。」
「そのことじゃない、のび太・・・先に謝っておくぞ。」
「へ？」

「ハ、ハ、ハックション！！」
ジャイアンはお決まりのようにクシャミをした。

「誰だ！！」
当然、二人は気づき、銃をかまえた。そしてこちらに向かってくる。

もういやだ、この展開・・・のび太は心の中でうんざりしていた。
いままで、あのクシャミで何回危ない目にあっただろう・・・
仕方がないので、のび太とジャイアンは隠れるのをやめ、姿を現した。
すると、静香ちゃんとスネ夫も出てきた。
「仲間を見捨てられるか・・・」
とスネ夫は言った。
のび太はそのスネ夫を見て、素直に、成長したな、と思った。
銃をかまえている二人のうち、右側にいる人がしゃべった。
「誰だ君たちは・・・ここは一般人は立入禁止(たちいりきんし)だぞ！」
すると左側の人がつぶやいた。
「ま、まさか君たちは・・・・いや、間違いない・・・」
左側にいる人が右側の人に言った。
「銃をおろせ、曹長(そうちょう)。この人たちは、私の知り合いだ。」
「えっ！中佐(ちゅうさ)の知り合いですか、失礼しました！」
といい、銃をおろした。
左側にいた人がこちらに歩み寄ってきて、ヘルメットを取った。
その人は男の人だった。２０代だろうか・・・若々しい顔立ちだ。
それよりも、のび太はこの顔に見覚えがあった。前にどこかで会ったように思えた。
その男の人はヘルメットを取ると、のび太たちに話しかけた。
「やぁ、久しぶりだね・・・のび太君に静香さん、スネ夫君に武君(タケシ)。」

この口調には聞き覚えがあった。
多少声変わりしていて声は少し低くなっているが、おそらく彼に間違いない。

「出木杉！！」
出木杉はのび太たちを見て、
「そうだよ、よく分かったね、のび太君・・・」
と言い、笑みを浮かべた。

第五話　「殺戮兵器　『D』」

「なぜ出木杉がここにいるんだ！？」
ジャイアンは出木杉に聞いた。

「なにって・・・パトロールだよ。いつ、あいつが現れるか分からないからね・・・」
出木杉は答えた。
のび太は思った。出木杉の言った『あいつ』というのはまさか・・・

「曹長、わたしは、のび太君たちを安全な場所に連れて行く。君は引き続きパトロールをしていてくれ。」
「はっ！」
曹長と呼ばれている人は敬礼をして、その場を立ち去った。

そして出木杉はのび太たちを見て、
「さあ、行こうか。」
と、のび太たちに言った。

「行、行くって、どこへだ？」
ジャイアンが聞いた。

「・・・軍だよ。」
出木杉はまた笑みを浮かべて、言った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

のび太たちは出木杉の車に乗ることにした。
「ぐ、軍ってどのあたりにあるの？」
のび太が聞いた。
「まだあと少しかかるよ。まあ、軍っていうけれど、今向かっているのは、支部だけど。」
「へ？支、支部って？他にもあるの？」
「ねぇさっきから軍って言っているけど、たしか日本は憲法で戦争放棄をして、軍はもう作らないんじゃ・・・」
「・・・・・」
スネ夫の問いに、出木杉は黙ったままだった。少し悲しそうな顔をした。
「・・・それはあとで説明しよう。　それより、君たちはなんであそこにいたんだ？しかも、１０年前の姿で・・・」
のび太たちはドラえもんがウイルスに感染したこと、タイムマシンでここに来て、帰れなくなったことなど、これまでに起きたことすべてを話した。
出木杉は静かに聞いていた。
「そうか・・・だから・・・実はこれは全てドラえもんの仕業だよ・・・」
「やっぱり・・・」
のび太は出木杉の言葉におもわず、つぶやいてしまった。

やはりのび太は心のどこかでは、そう思っていたのだ。

出木杉は話を続けた。

「実は君たちは・・・この事件の犯人とされている。」

「え！！！？は、犯人ってどういうこと？」

のび太たちは驚いて出木杉に聞いた。

「君たちが急に消えたからさ。　最初は集団失踪事件として、家出じゃないか、誘拐じゃないかと、いろいろ憶測がとびかい、ちょっとした騒ぎになった。警察も捜査していた。君たちを被害者としてね。」

「しかし、君たちが消えてから二日後に、ある町が破壊されると言う事件が起きた。ここから少し離れた町だったけどね・・・その町は壊滅したよ・・・　ミサイルのようなもので攻撃されたらしい。しかし、そのミサイルの精度は当時の科学技術ではとてもありえないものだったんだ。」

「当時の・・・１０年前の科学技術ではありえない！？それって・・・」

「そう。のび太君の予想通りだよ。犯人はドラえもんだった。目撃証言もいくつもあった。そして警察は、犯人はドラえもんとし、指名手配をしたんだ。しかし捕まらなかった・・・いや、捕まえることができなかったんだ。捕まえようとして殺されてしまった警官が何人もいた。」

「そ、そんな・・・ドラえもんが、そんなこと・・・」

のび太だけでなく、みんな顔が青ざめていた。出木杉以外・・・・」

「そしてドラえもんはいくつもの町や市を破壊していた。しかし警察もいくつか情報をつかんだ。
それは、ドラえもんはロボットであること、いろいろな現代の科学技術ではありえないものをいくつも所持していること。そして、あのロボットの所持者が失踪したのび太君であることだ。
ここで警察は一つの仮説が思い浮かんだ。その仮説とは、のび太君たちが、ロボットであるドラえもんを操作しているのではないか、というものだった。そして、今度はのび太君たちは被害者としてではなく、容疑者として捜査することになった。しかし見つからなかった・・・まぁ、未来にいたんだから当然だな・・・」

「え？ちょっと待って・・・ということは僕らは犯罪者になっているわけだよね・・・なんで出木杉は僕らを捕まえなかったの？」
スネ夫は尋ねた。

出木杉はかすかに笑みをこぼして答えた。

「実を言うとね・・・僕は今のび太君たちの話を聞く前に、君たちが犯罪者でないことに気づいていたんだ・・・うすうすだけどね。
　僕は君たちが消えてしまった翌日、のび太君の部屋に行ったんだ。何か手がかりを見つけるためにね。　すると、あることに気がついたんだ。そう、タイムマシンがないことに。まぁ、確信はできなかったけどね。」

「すげぇ！さすが出木杉！」
ジャイアンが叫んだ。

「ねぇ、それからどうなったの？」

のび太は尋ねた。

「あぁ・・・そうだね。警察は君たちも見つけることができず、ドラえもんも止められない・・・警察ではもう太刀打ちできなかった。自衛隊も出動していたが、被害は増える一方だった・・・ここで政府もついに臨時国会を開き、議論した。　そして、ある法案が可決され、新しい法律ができた。」

「どんな法律だったの？」
のび太が聞いた。

「・・・憲法特別廃止法さ・・・この法律は、緊急時の場合は憲法を一時的に廃止にすることができる法律さ。」

「そ、そんなことがありえるの！？」
静香ちゃんが叫んだ。

「そんなことをしたら、国民は反発するんじゃないか？」
スネ夫が言った。

「・・・ところが、国民の反発は一切なかった。　国民もそうするしかないと思っていたんだ。こうして日本は軍事国家となったんだよ。　さらに国は、国の予算の八割を軍事費にあてることになった。　こうすることによって、兵器の技術が数倍に進歩してまた、医療技術も少し進歩したんだ。　だけどそれでもまだドラえもんを止めることができていない、日本の人口はドラえもんに襲われる前に比べて、いまでは三分の一にまで減ってしまった。　今、軍はドラえもんのことを殺戮兵器、『D』と呼んでいる。」

のび太の顔はさっきよりいっそう、青ざめていた。まわりをみると、出木杉以外、みんな青ざめていることに気づいた。

のび太は出木杉が恐ろしく感じた。みんなが青ざめている中、平然(へいぜん)と話していたからである。

「出木杉、変わったな・・・・」

とのび太は思った。

少しすると、大きい建物が目の前に見えてきた。

「よし、着いたよ、みんな・・・」

出木杉はそう言うと、車を止めた。

それは大きな白い、すすけた建物だった。

まるで、まわりの荒地(あれち)と同化しているようだった。

建物に付いてある看板には、『日本軍　０７５支部』と書かれてあった。

第五話　「殺戮兵器　『D』」（後書き）

ドイル「え～ドイルです。久しぶりに後書きを書こうと思います。
それでは今回のゲストはのび太君です。」

のび太「よろしくね。」

ドイル「いや～前のゲストより、かなりいい人を呼びました。」

のび太「それよりさ、この『のびｖｓドラ』なんだけど、キャラが少し崩れてきてない？」

ドイル「（ギクッ！）いや・・・気のせいだよ。」

のび太「いや、いや、絶対崩れてるよ、だいたい、今回の話だって、あの難しい会話を僕が全部理解できるわけないじゃん。スネ夫や静香ちゃんならまだしも・・・」

ドイル「そーゆーこと自分で言うなよ・・・あれ？ジャイアンはどうだと思う？」

のび太「ジャイアン？理解できるわけないじゃん、あのゴリラに・・・」

ドイル「そうだよねー。」

ジャイアン「だ・れ・が・ゴリラだって？」

の&ド「ジャ、ジャイアン！！」

ドイル「どうしてここに？」

ジャイアン「はぁ？お前が呼んだんだろ！」

ドイル「君は次の予定なんだけど・・・」

ジャイアン「ありゃ？間違えたかな・・・」

のび太「ま、まぁ、間違いは誰にだってあるよ。」

ドイル「そ、そうそう・・・それじゃ僕たちはこれで・・・」

ジャイアン「貴様ら・・・今日は生きて帰れると思うなよ・・・」

の&ド「ぎゃ、ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

〜ここからは、ご想像にお任せします〜

ドイル「こ、これで後書きを終わります・・・（ガクッ）

第六話　「面会」

「すっげー、なんだこの建物は？」
ジャイアンは建物を見上げて言った。

のび太も同じことを思っていた。

スネ夫と静香ちゃんも建物を見上げていた。

「ここは『日本軍　０７５支部』。日本にはこれと同じような支部が１００以上あるんだ。」
出木杉がのび太たちに説明した。

「へ～～」

「しっかりこの時代のことを知ってもらわないとね。君たちは僕らの希望になるかもしれないんだから・・・」
出木杉は笑みを浮かべて、小さくつぶやいたが、のび太たちには聞こえなかった。

「よし、みんな・・・そろそろ入ろうか。なかを案内するよ。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

のび太たちは出木杉に案内され、中に入った。

中は広かった。ろうかいろいろな方向に入り組んでいて、まるで迷路のようだった。
そこをたくさんの人たちが行き交っていた。
のび太たちは出木杉を先頭にろうかを進んでいた。

「ねぇ、これからどこへ行くの？」
のび太が聞いた。

「これから、この支部をまとめている、将官に会いに行く。君たちのことを報告するためにね。」

「しょ、将官って、なに？」

「あぁ、そうだったね・・・まず、軍の階級について教えよう・・・
軍の階級は低い方から、
二等兵、一等兵、上等兵、兵長、伍長、軍曹、曹長、准尉、少尉、
中尉、大尉、少佐、中佐、大佐、少将、中将、大将、元帥・・・・
となっていて、そのうち少将、中将、大将のことを将官というんだ。
一つの支部ごとに、一人の将官が支部長として、支部をまとめているんだ。」

「へ～でも、元帥ってなんなの？」
のび太が聞いた。

「元帥は本部にいて、全体の総指揮をしているというけど、くわしいことは、僕も知らないんだ。　さあ、着いたよ。」

出木杉は一番奥にある、少し大きな扉（とびら）の前に立って言った。
出木杉は、その扉をノックして、呼びかけた。
「少将、沖田少将、いらっしゃいますか。出木杉です。」
「・・・入っていいよ。」
すると、中から声がした。
「失礼します。」
出木杉は扉を開けた。
中は広い部屋があった。その部屋の奥に大きな机が置いてあった。
その机には、一人の男の人が座っていた。
座っていたために顔がよく見えなかったが出木杉が入ってくると、
その人は椅子から立ち上がった。
その人は小柄（こがら）で、目つきが細かったが、小顔（こがお）でおだやかな印象だった。
「それで、どうしたの、その子達は・・・」
「はっ。実はこのことでご報告があります。」
出木杉はいままでのことをすべて話した。
その人は話を聞くと、

「ククッ・・・そーゆーことか。じゃあ、まず自己紹介しないとね♪　僕は、沖田（おきた）　影成（かげなり）。少将で一応、ここの支部長をさせてもらっている。まぁこれからよろしくな♪」

「え？う、うん・・・よろしくお願いします。」

のび太は少し拍子抜（ひょうしぬ）けた。
この支部のトップ、というのだからもっと怖そうな人物だと思った。
なぜなら、ジャイアンをよく見ているから・・・

のび太はジャイアンをチラッと見た。

ジャイアンはともかく、とても沖田さんはおだやかそうに感じた。
会社ならともかく、ここは軍なのだ。
これでいいのかなぁ・・・・

とのび太が思っていると、沖田さんがまた口を開いた。

「さぁて、僕の自己紹介はこれくらいでいいかな♪　・・・・さてと、次が本題なんだけど・・・」

のび太は少し驚いた。　いままでの口調とぜんぜん違うのだ。冷酷（れいこく）な口調で、別人のようだった。

沖田さんは再び椅子に座った。

「なぁに、そんなたいしたことじゃないよ♪　ねぇ、君たちさ・・・・軍に入らない？」

「え！？」
のび太たちは予想していなかった言葉に驚いた。
沖田さんはそんな僕らを見て、静かに笑っていた。

第六話　「面会」（後書き）

ドイル「どうも、ドイルです。　もうお気づきだとは思いますが、サブタイトルをつけてみました。それでは、今回のゲストは、ゴリ・・・ジャイアンです。」

ジャイアン「おい、さっきなんか、言いかけなかったか？」

ドイル「（ギクッ）いや・・・だれもゴリラとは言ってないけど・・・」

「ドカッ！！」

ドイル「ジャ、ジャイアンは使うとしたら、どんな武器を使いたい？」

ジャイアン「なんだ、いきなり・・・」

ドイル「実は、人物を設定するときに、他のキャラはだいたい決まっているんだけど、ジャイアンの武器が決まってないんだよ・・・」

ジャイアン「そうだな・・・だれよりも強いヤツがいいな。」

ドイル「そんなの、怖くてできないよ・・・　タイトルが『のび太ｖｓジャイアン』になりそうだし・・・・」

「ボカッ！！」

ジャイアン「それより、俺のセリフ、少なくねぇか？」

ドイル「まだ必要ないもん♪」

「バキッ！！」

終わります。（オチがない・・・）

～おまけ～

ジャイアン「オチがないなら、俺がつけてやろうか？」

ドイル「結構です・・・」

第七話　「決意」

「ど、どういうことですか？」
静香が聞いた。

「どうって・・・そのまんまだよ。　軍に入って地球守らない？」

「僕たちまだ小学生ですよ。・・・軍に入るなんて無理ですよ！」
スネ夫がすかさず反論した。

「あ、そのことなら大丈夫♪　僕がＯＫと言えば入れるの。　この前にも一人そうしたし。」

このとき、沖田さんが言った、『一人』の正体を知ってのび太たちが驚くのは、また少し先の話。

「そんなんでいいの・・・　それに武器とか使えないし、人を殺すのもやだよー！」
スネ夫が反論した。

「武器なら、しっかりと教育係をつけるし、第一、人は殺さないよ。
戦争するわけじゃないんだから・・・」

「え？」

「この軍は『Ｄ』を壊すために作られた軍だよ、つまり『Ｄ』を壊したらこの軍は必要なくなるわけ。　それに、日本以外で残っている国と言えば、アメリカ、ロシアと、ヨーロッパくらいだよ。他は

もう壊滅さ。　生き残った人も残っている国に移民したから。　だから、『D』の所有者であるのび太君たちが入ってくれたら百人力なんだよ。」

「でも・・・」
悩んでいるスネ夫の代わりにのび太が言った。

「僕は入らないよ。」

「どうして？」
今度は沖田さんが聞いてきた。

「ドラえもんは僕の友達だ。ドラえもんを助けたいんだ、ドラえもんは壊させない！」

「・・・ドラえもんが直らないとしたら？・・・・・」
沖田さんはまた冷酷な声で聞いてきたので、のび太は、少しひるんだ。
しかし負けじと、のび太は沖田さんをにらんだ。
数秒の間、のび太と沖田さんは無言のままにらみ合っていた。
静香、ジャイアン、スネ夫にはその数秒がとても長く感じられた。

「・・・フフッ・・・いいね、その信念。」
先に口を開いたのは、沖田さんのほうだった。
のび太も実はかなり冷や汗をかいていた。
さらに沖田さんは話を続けた。

「・・・だけど、軍には入っておいたほうがいいよ。　ここで君たちだけが、しかも無防備でドラえもんに会っても、何もできやしない。へたすると、殺されてしまうかもしれないよ。　」

のび太は沖田さんの言い方が『D』から『ドラえもん』に変わっていることに気づいた。

「ここは軍に頼ったほうがいいんじゃない？　この支部はできるだけ救済に力を注いでみるよ。　ま、それには君たちの協力が必要なんだけど・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・」

のび太は悩んでいた。

沖田さんは悪い人ではないなと感じた。
少なくとも、すぐにうそをつくような人ではないと思った。

しかし、さっきの沖田さんの言葉が心に残った。
「ドラえもんが直らないとしたら？・・・・」

のび太はポケットの中に手を入れて、ワクチンフロッピーがあるのを確認した。

「・・・・三日・・・・・・・・」
ここでのび太はドラミちゃんから言われたことを思い出した。

「三日が過ぎれば、ワクチンは効かなくなり、壊すしかなくなる・・・・・！」

そうだった、三日だった。　四日、五日ぐらいならまだしも、もう・・・十年もたっている。

元に戻すことは絶望的になっていた。

そして、考えてみたらドラえもんは世界を破壊しているわけだ。壊そうとしても無理はない。
それでものび太は、ドラえもんを直したかった、いや助けたかった。

ドラえもんは今、苦しがっているに違いない。

のび太は考えて、ある一つの答えを出した。

できることなら直したい、だけどもし、直せなかったら・・・壊すしかない。
おそらく、それがドラえもんを楽にさせてあげる、唯一(ゆいいつ)の方法だと思うから。

そして、できることなら僕の手で・・・・・・・

「・・・・・分かりました。　僕を軍に入れてください。」

のび太は覚悟を決めて、言った。

「のび太さん。どうして急に？」
静香がのび太に聞いた。

「ドラえもんはこの世界では、十年も暴走をして、苦しんでいると

思うんだ。
そして多分僕を待ってる・・・・
僕がドラえもんを楽にさせないとだめなんだ！　僕がドラえもんを助ける！！」

のび太は叫んだ。

すると、黙って聞いていたジャイアンが口を開いた。

「のび太・・・『僕が』じゃねぇ・・・『僕たちが』だ！　俺様も、ドラえもんをぶん殴って、目を覚まさせてやる！」

「そうよ。」

「そうだ、水臭いぞ、のび太のくせに！」

「ジャイアン・・・静香ちゃん・・・スネ夫・・・・」
そうつぶやいた、のび太の目には涙がこぼれていた。

「みんな、ありがとう・・・・」

沖田さんはこの様子を見て、優しい笑みを浮かべた。
「これから、よろしく頼むよ。　ドラえもんを助けることは、そのまま僕らを助けることになるんだから。」

第八話　「教育係」（前書き）

この話に出てくるあのキャラを出そうか迷って、少し更新が遅れました・・・（言い訳）

第八話　「教育係」

のび太たちは全員軍に入ることとなった。

「じゃあ、ここに名前を書いて。」

沖田さんは引き出しから紙を四枚取り出した。　どうやら契約書のようだった。

僕たちは言われたところに名前を書いた。

「え～っと・・・のび太君、武君、スネ夫君は二等兵。しっかり教育係をつけるからね。　そして、静香さんは女性だからいろいろ選べるよ。」

「どういうものがあるんですか？」

「え～っと・・・軍服作成、掃除係、研究員助手、調理係にあと・・・救護に二等兵といったものがあるよ。どれがいい？」

「私、のび太さんたちと同じ、二等兵でいいです。」

「まって、静香ちゃんは危険だよ。」

とのび太が止めた。

「でも・・・」

「静香ちゃんは救護でいいんじゃないかな？　ぼくたちがケガをしたときは、たのむよ。」

「・・・・分かったわ、のび太さん。　でも・・・ケガはなるべくしないでね。」

「分かっているよ。」

「じゃあ、決まったね？」

と沖田さんが聞いてきたので、

「ハイ！」

と、僕たちは迷わずに言った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ここは『日本軍０７５支部』から少し離れた荒地。

ある数体ほどの鉄のような物体が０７５支部に向かっていた。

ゆっくりと、それでも確実に・・・・

****

のび太たちは出木杉に案内され、ある棟（とう）に着いた。

「ここは・・・？」

「ここは宿泊棟でだいたいの兵士がここに住んでいる。君たちの部屋はもう確保してあるから、こっちだよ。」

のび太たちはある部屋の前まで来た。

表札のようなものには『４０４号室』と記してあった。

「のび太君は、この４０４号室。武君は４０５号室、スネ夫君は４０６号室だ。一応、隣り合うようにしたよ。そのほうがなにかといいだろ？」

「ありがとう、出木杉・・・」

「あの・・・私の部屋は？」

「あぁ、静香君の部屋は少し離れたところにある、女性用の棟があ

るから。今、案内するよ。じゃあのび太君たちは自分の部屋で待っていてほしい。もうすぐ教育係が来るから。」

「出木杉はこれからどうするの？」
のび太が聞いた。

「僕は静香君を案内したあと、自分の部屋に戻って仕事をしなくちゃならない。もしなにかあったら僕の部屋まで来てくれ。　僕の部屋は０１３号室だから。」

「分かった」

「よし、じゃあ静香君行こうか。」

「え、はい。」

出木杉は静香ちゃんと一緒に立ち去っていった。
僕たちはとりあえず自分たちの部屋に入ることにした。
扉はさっき出来杉に渡されたカードを隣にある機械に差し込むと、

『ピーーーッ』

と音が鳴って、扉が開いた。

部屋の中はのび太の勉強部屋（？）より少し大きく、少し広いと感

じたが、それでもこれから生活するにしては狭いと感じた。

のび太はとりあえず部屋の真ん中で寝転がり、これまでのことを思い返すことにした。

いままでのことを振り返ってみると、この少しの間にいろいろなことがありすぎた。

ドラえもんがいなくなって、未来が変わり、ドラえもんを止めるために軍に入ることになった。

本当に信じられないことが続いた。

のび太はいつのまにか寝てしまった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「・・・・・なさい。・・・起きなさい。」

どこからか声がした。だれだろうとのび太は思った。

また、ここでのび太は自分が寝ていることに気が付いた。

のび太は無意識に少しずつ目を開けた。

すると女の人の顔が見えた。

初対面(しょたいめん)じゃなかった。

ピンク色の髪に緑色のような目。

のび太は目を疑った。

「リ、リルル！？」

そこにいたのはまちがいなくリルルだった。

第九話　「教育開始」

「リルル！？」

そこにいたのは間違いなくリルルであった。

「な、なんでこんなところに？　も、もしかして、沖田さんの言っていた教育係って・・・」

のび太が聞いたとき不意に後ろから声がした。

「こら！リルル大尉にそんな口の聞き方しないの！」

「あ、あなたは？」

のび太が後ろを向くと、そこには女の人が椅子に座っていた。

その女性は２０代後半だろうか・・・
髪は黒色のショートヘアー。やせていて、肌に若々しさはあるものの・・・うまくはいえないが、どこか『若くて優しいお姉さん』という感じではない。

「あのさぁ、君、人に名前を聞くときはまず自分から名乗るものじゃない？　それにもう一度言うけど、君、上官に対してその口の聞き方は何！？」

「え、あ・・・ご、ごめんなさい・・・」

「『ごめんなさい』じゃなくて、『すいませんでした』！」

「す、すいませんでした・・・」

のび太は少ししゅんとした。

「ま、まぁいいじゃない、梢（こずえ）。」

「よくないですよ、大尉、こういうのはまず礼儀から教えないと・・・

・ まぁ、今日からじっくり教えますし。」

「え？あ、あの『教える』って、もしかして・・・あなたが僕の教育係ですか？」

「えぇ、そうよ。」

「え？じゃ、じゃあリルル・・・さんは・・・・」

「ごめんなさい、のび太君、私もそうしたいんだけど、いろいろ忙しくって・・・今日はちょっと見に来ただけだから・・・詳しい話はまた今度ね。」

そう言うとリルルは扉の前に行き、
「じゃぁ、また今度ね、のび太君。」
と言い部屋から出て行った。

部屋には、呆然と立ち尽くすのび太とその教育係の二人だけが残された。

「じゃぁ、まず自己紹介からね、君、名前は？」

「えっと・・・野比のび太です。一応、すすきヶ原小学校の六年生です。」

「ふぅん・・・特技とかあるの？」

「昼寝と射撃です。」

「へぇ、昼寝はともかく、射撃か・・・　じゃぁ、次は私ね。　私は山本（やまもと）　梢（こずえ）。階級は軍曹よ。これからよろしくね。」

「あ、はい。よろしくおねがいします。」

「さて・・・自己紹介も終わったし、早速始めますか。」

そう言って梢さんは隣にあったバックに手を入れた。
中に入っていたのは１００枚ぐらいはある、大量の紙をとじたファイルだった。

それをのび太に手渡すと
「さて、まずはその中に書いてあるものを全て暗記しなさい。　あとでテストするから。満点を取るまで寝れないからそのつもりで。」

「え！？いや、無理ですよ・・・」

「無理とか言わない！人間、死ぬ気になればなんでもできる！じゃぁ、がんばってね♪」

「ひぇ～～～～～～～～～～～～～～」

のび太のつらい日々が始まった。

第十話　「０８９支部」（前書き）

１０話目にして、ついにあのキャラ再登場！

第十話　「０８９支部」

「あ、頭がガンガンする・・・」

こうつぶやいているのはもちろんのび太である。

あれから3時間ぐらいたっただろうか・・・

１時間ごとにテストをしているが、これまでの最高得点は１８点。

もちろん１００点満点での１８点だ。

このままではドラえもんを救う前にのび太が壊れそうだった。

梢もまさかここまで取れないというのは予想外だった。

「・・・もういいわ。特別に、満点をとらなくてもいいよ。まだやることもあるし。」

「やった～～」

「だけど・・・せめて半分・・・５０点は取りなさい。」

「うへ～～～」

「さぁ、あと少し、がんばって。」

のび太のテストはまだまだ続きそうだった・・・・

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ここは『０７５支部』から少し遠くにある「０８９支部」。

この支部長である中平（なかひら）中将は今、窮地（きゅうち）にたたされていた。

『D（ドラえもん）』に突然、襲われているのだ。

中平中将は太っている４７歳の中年で、これまでワイロなどをおくって、この階級までたどり着いた。

いうならば実戦経験がほとんどないのである。

この支部にしたのも、一番安全な場所と聞いたからだ。

中平は支部長室にこもり、椅子に座って机を小刻みにたたいていた。
動揺しているのは明らかだった。

襲われて、中平はすぐに本部にＳＯＳ信号を出した。
しかし、一向に本部からの返事は来ない。

「くそっ・・・どうすればいいんだ・・・俺はまだ死ぬのはごめんだぞ！」

「中平中将！」

すると、不意に兵士が入ってきた。

「なんだ、どうした！」

「ほ、報告します・・・研究員、医師などの非戦闘員はほぼ全滅です。　兵士、操縦士含めて戦闘員もほとんどが戦死しました。　今、戦闘中ですが・・・おそらく全滅は近いと思われます。」

「な、なんだってそんな・・・」

「やはり『Ｓ－Ｒ』の影響だと・・・」

『Ｓ－Ｒ』。正式名称は『ＳＣＲＡＰ（スクラップ）　ＲＯＢＯＴ（ロボット）』。
文字通り、『鉄くずのロボット』と言う意味である。

『Ｓ－Ｒ』が現れたのは、一年ほど前だった。

突然、大量のロボットが目撃された。
それは、日本各地に点在（てんざい）していた。

軍では、『Ｄ』が関係していると言うことに気づき、『Ｓ－Ｒ』を解体してみた。

しかし、いくら調べても、ただの鉄の塊だった。

しかし、日ごとにいろいろな形のロボットが目撃され、軍などを襲いだしたのだ。

しかし、軍は何も手がかりを見つけ出さずにいた。

「『ＳＣＲＡＰ（スクラップ）　ＲＯＢＯＴ（ロボット）』だと！　おい、なんとかしろ！」

「なんとかと言われましても・・・」

中平はどんどん絶望的になってきた。
中平は自分はこれ以上は確実に昇進できないなと思った。
もしかしたら降格、最悪の場合は戦死・・・・・
いやだ。そんなのはごめんだ。
あぁ・・・本部に帰りたい・・・・
「わ、私だけでも、いますぐこの支部を捨てて逃げるぞ！」
「だ、だめですよ、そんなこと。」
「うるさい！　貴様、私の命令に逆らうのか！？」
「・・・・・」
突然、兵士の顔色が変わった。
それは怒りの表情ではなく、恐怖の表情だった。
「おい、どうした・・・・」
「う、う、後ろ・・・」

「後ろ？」

中平は後ろに振り向くと、窓の外(そと)に何かがいる。

青い体に赤い鼻。白目をむいて、ひげをはやしている。

まちがいない・・・・・

「Dィィィ

第十話　「０８９支部」（後書き）

～お知らせ～

質問を募集します。（話が少しややこしくなってきたから）
「ここが分かりにくい」などありましたら、教えてください。

質問は後書きで答えていきます。

第十一話　「０８９支部〈２〉」

〈０８９支部　支部長室前〉

ドラえもんは支部長室を破壊すると、ゆっくりと中へ入っていった。

そこには爆発音を聞いて駆けつけてきたのであろう、兵士が数人いた。

ドラえもんに気づくと、兵士たちはすぐに銃で撃ってきた。

『ｊウイルス』に感染して１０年、ドラえもんの防御力、破壊力はまだ少しずつパワーアップしている。

しかし、その分、中身はどんどん侵食されていった。

ドラえもんは兵士たちに攻撃し、そこにいた兵士たちは一瞬で全滅した。

ドラえもんには傷一つなかった。

ドラえもんはそのまま支部の中へ入っていった。

＊＊＊

〈０８９支部〉

さっきまで遠くで聞こえていた銃声が聞こえなくなった。

ついに俺だけになったかと明智(あけち)少佐は思った。

それと同時に、当然のことだろうとも思った。

みんな『Ｄ』との戦闘経験がないからか、『Ｄ』の本当の恐怖を知らず、訓練も真面目にやらなかったからだ。

まぁ、訓練の内容、人物の採用などをすべてその支部に任せっきりにする、本部もどうかと思うんだが。

そのため、こういう支部はすぐに『Ｄ』につぶされる。

この支部では『Ｄ』との戦闘経験があるのは自分しかいなかった。もちろんただでは帰れなかった。

右目を攻撃され、右目は見えなくなった。

明智は自分の右目についている眼帯を触りながら思った。

すると、明智の近くに１機の『Ｓ－Ｒ』が飛んできた。

丸くて、ふわふわと浮いた、ＵＦＯのようなやつだった。

明智は愛銃であるグレネードランチャーをかまえ、すかさず撃った。

見事に命中し、『Ｓ－Ｒ』は動かなくなった。

明智はそれを確認すると、ゆっくりと進んでいった。

明智は今、三階にいた。とりあえず下に行き、この支部から脱出しようと思った。

おそらく、ここに長居していても殺されるだけだろう。

弾が残っているうちに逃げ出すのが一番いいだろうと思った。

二階に行くと、一階への階段が瓦礫（がれき）でふさがれていた。

しかたがないので、遠くにある非常階段を使うことにした。

二階には研究室や、医務室などがあった。

ところどころ研究員や医師が殺され、倒れていた。

『S－R』も五機ほどいたので、一体ずつ倒していった。

「やはりここも全滅か・・・・・」

とつぶやいた時だった。

研究室に一人の人間がいた。

「おい、大丈夫か。」

「あ、少佐ですか・・・よかった～。」

身なりからして研究員というのが分かった。

「お前は？」

「大村といいます。研究員です。」

「そうか。よし、早くこの支部から出るぞ。」

「は、はい。」

そして研究室から出たときだった。

遠くで爆発音がした。その方向を見てみると、

廊下（ろうか）の先に『D』が・・・・・

「あ、あれは・・・・・」

「どうしました？・・・・・え！？あ、あれって・・・」

『D』はゆっくりとだが間違いなくこちらに向かってきている。

「あ、あ・・・・ど、どうすれば・・・・そ、そうだ！！」

大村はそう言うと、再び研究室に入っていった。

明智はとりあえずグレネードランチャーを撃ちまくった。

しかし『D』にまったく効いている様子はない。

『D』はどんどん近づいてきていた。

もう明智にはお手上げだった。

そのとき、突然シャッターが閉まった。

明智は何が起こったのか分からず、研究室に入った。

そこでは大村が機械を操作していた。

「あ、シャッター、閉まりました？」

「ああ、君が閉めたのか・・・」

「ええ・・・不意にここからシャッターの操作が出来るの、思い出しまして。」

「あのシャッター、特別製で、ちょっとやそっとじゃ壊れませんから、当分の間大丈夫かと・・・・・・」

そのとき、すさまじい爆発音が外から聞こえた。

「え・・・・・？」

「な、なんだ、まさか・・・」

二人は廊下を覗(のぞ)いてみると、『D』はシャッターを簡単に破り、入ってきた。

二人はすぐに研究室の扉を閉めた。

「ま、まさかこんなに早く・・・ど、どうしますか、少佐・・・」

『D』の足跡がしだいに大きくなってきた。もう近くまで来ている

ようだ。

「一体、どうすればいい、どうすれば・・・・・・・・・」

第十一話　「０８９支部〈２〉」（後書き）

グレネードランチャー

銃の名前です。

詳しくはウェブで調べてください。

第十二話　「闇」

〈０７５支部〉

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・どう・・・ですか・・・」

「５６点！」

「やった～。やっと終わった・・・・」

一体どれほどの時間が過ぎただろう。

のび太は少しずつ点を上げていき、やっと合格点に達したのだった。

努力したのはのび太だけではなかった。

梢はほとんどの漢字に振り仮名をつけ、つきっきりで勉強を教えた。

「はぁ～～～。こんなにかかるなんて予想外だわ・・・・まぁしかたないか。え～と、次は・・・」

そのとき、館内放送がかかった。

『連絡します、野比のび太、剛田武、骨川スネ夫の三兵士とその教

育係は至急、支部長室へ。』

「あら、なにかしら・・・・行ってみましょう。」

「あ、は、はい。」

のび太たちが支部長室に着くとジャイアンがすでに来ていたが、スネ夫の姿は見えない。隣にいる人はおそらくジャイアンの教育係の人だろう。

「やぁジャイアン。」

「おぅ、のび太か。」

「スネ夫は？」

「さぁ・・・まだ来てないぞ。」

「そう・・・。それで隣にいる人は？」

「ああ・・・この人は・・・」

そのとき隣にいた人が割り込んで入ってきた。

「やぁ、君がのび太君か。」

「は、はいそうです。あなたは・・・」

「僕？僕は武君の教育係をしている真壁（まかべ）　信吾（しんご）だ。ま、これからもよろしく。」

「あ、よろしくお願いします。」

黒髪の短髪で顔立ちは若々しく、まさしく青年という感じだ。・・・・・それにしても、この声・・・のび太はどこかで聞いたことがあるような気がした。どこだっけ・・・・

とりあえずスネ夫がくるまで、ここで待っていることにした。やはり、三人一緒の方が心強いからだ。

のび太はジャイアンとこれまでのことについて話していた。

一方、二人の教育係の梢と真壁は少し離れたところで話をしていた。

「いや～子供なのに礼儀が正しいな～。いや～ボクもこの子の教育係が良かったな。梢サンがうらやましいや。」

「あら、そんなことないと思うけど。」

「いやいや、武君、かなり暴れ者で・・・困りますよ。」

「それで？」

「あ、いや・・・あの子、おとなしそうじゃないですか。」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・？」

「・・・だから問題なのよ・・・」

「え・・・どういうことですか？」

「あの子はたしかにおとなしいわ。多分すごい優しい子なんだと思う・・・　けど、そんな子がこの戦いに耐えていけるかしら。」

「あっ・・・」

「毎日、この戦いによる犠牲者が出ている。しかもその原因は自分の親友よ。あの子、しっかり乗り越えていけるかしら・・・」

「たしかに心配ですね。」

「・・・まぁ、乗り越えるかどうかはあの子次第ね。私たちはそのサポートをしてあげることぐらいしかできないし。」

「・・・そうですね。」

「じゃあ、そろそろ行こうか。」

「え、でも、スネ夫君がまだ来てないようですよ。」

「・・・・でもこれ以上待てないわ・・・のび太君、武君いきましょう。」

「スネ夫はどうするんです？」

「今は沖田さんに会うのが先。大丈夫、後から来るわ。」

「・・・・分かりました。行こう、ジャイアン。」

「おう。」

のび太たちは支部長室のドアをノックし、部屋の中に入った。

なぜのび太たちを呼び出したのか、梢にも分からなかった。

沖田さんは何を考えているのか分からないときがときどきあった。

まぁ、信用はしているのだが。

中に入ると沖田が座っていた。

「やぁ、わざわざ呼び出して悪かったね。あれ？スネ夫君は？」

「まだ来ていないんです・・・」

「ふぅん・・・一応呼び出してみるか・・・」

そう言い、沖田は電話の受話器を取った。

『プルルルル・・・・・』

「・・・・・あ、もしもしボクだけど。スネ夫君は・・・・うん・・・・うん・・・・なるほど・・・・」

このときのび太にはかすかに沖田が笑ったように感じた。

「・・・・・うん。・・・・分かった。・・・・じゃあ・・・・」

『ガシャン』という音とともに沖田が電話を切った。

「どうでしたか？」

「うん・・・・・まぁ大丈夫だ。心配しなくていい。」

「はぁ・・・・・」

「それより、何のようです？」

梢が聞く。

「ああ、そうだったね・・・・君たちに早速仕事を与えようと思って。」

「「！」」

僕たちは突然のことに驚きを隠せない。

「え～と、実は０８９支部がＳＯＳ信号を出してそのまま音信不通になっている。どちらか一人はその調査に、もう一人はこのあたりのパトロールをしてほしい。」

「ＳＯＳ信号って・・・」

「何があったのかは分からない。しかし・・・」

「ドラえもんが関わっている可能性は高い。」

のび太が答える。

「―そう。そして次はここが襲われる可能性もある。」

「・・・・・・・」

僕たちは黙っていた。

「・・・・のび太は、どうする？」

ジャイアンが聞く。

「ぼくは・・・・」

のび太が口を開く。

僕は、どうするべきなのか・・・

のび太は悩んだ。

ドラえもんと出会える可能性が高いのは・・・・０８９支部だろう。

そう思った。

そう考えた

―なのに

「ぼくはここに残る。」

「そうか。」

沖田はうなずいた。

「それでいい？武君。」

「はい。」

ジャイアンがうなずく。

―あれ？

自分で自分が分からない―

なぜ―ぼくは・・・？

のび太は自分が分からないまま支部長室を出て行った。

―心に闇を抱えて。

第十三話　「守護の意志」（前書き）

今回は人物の気持ちが重点的に書かれています。

進展はあまりありませんが大切な部分になるので読んでおくことをお勧めします。

第十三話　「守護の意志」

なぜだろう？

のび太は自分の心に問いかける。

ドラえもんを止めたい―

その気持ちは変わらない。

そのためにはまず出会わなければ。

当然の答えだ。

ではなぜ・・・・

―怖かった。

―怖かった？

のび太は自問自答を繰り返す。

そして、気づく。

僕はまだ現実を受け入れられていない・・・

受け入れられることが出きない。

―会いたくない。

―ドラえもんに会いたくない。

会ってしまえば全ての現実を受け入れてしまうことになるから。

のび太は改めて思う。

僕は、臆病者だ―

＊＊＊

「バカなこと言わないでください。」

「で？告白？いや～照れる・・・」

沖田の顔面に拳(こぶし)が飛んできた。

見事にクリティカルヒット。

「それで・・・本題は？やっぱり・・・」

「もう一発くらいます？」

「すみません。もう言いません。」

「まったくこの人は・・・」

「・・・・・・」

「・・・・危険です。」

「・・・・・・」

「何を考えているんですか！？彼らにはまだ早すぎます！」

「・・・それはもちろん分かっている。」

「だったらなぜ・・・」

「人手不足。」

「嘘です。」

「はぁ・・・」

沖田はためいきをついた。

「彼らには出来るだけ早く経験をつませたい。」

「しかしそれでもしもの事があったら・・・」

「その時はその時だし、なんたって君たちがいる。」

「・・・・どういう意味です？」

「そのままの意味さ。ぼくは君たちが彼らを守ることが出来ると信じている。」

「そんな勝手な・・・」

「自分勝手じゃないと支部長は務まらないよ。」

沖田は笑顔で言う。

梢もつられて苦笑い。

梢は内心うれしかった。
沖田さんが自分を信用しているということに。
同時にプレッシャーにもなるわけだが。

「まぁ、彼らをよろしくたのむよ。」

のび太君をまもる、か―

梢はそうつぶやいて支部長室を後にした。

第十四話　「記憶～雨の記憶～」（前書き）

遅れてすいません。

今回は梢の過去ということで・・・

第十四話　「記憶～雨の記憶～」

血のにおいがする・・・・雨のにおいが鼻につく・・・・・・

思い出すのは、あの惨劇――――――。

思い出したくもない、あの三年前のこと。

私は四年前に軍に入隊した。

周りには『世界を救いたい。』なんていう、いかにも優等生の回答のような事を理由として話していたが、本当は違う。

もし仮に私が『D』を倒したとして、世界を救ったとしてもそれは『結果的に』そうなるだけで一番に望んでいるわけではない。

人は必ず何かしらの『行動』を起こし、それに対して良かれ悪かれ、必ず『結果』がついてくる。

問題はその者が『何のために行動をするか』だ。

多くの者は行動につく『結果』のために行動をする。

『合格』のために勉強をする。

『勝利』のために練習をする。

しかし、人はたまに『行動』のために行動をする。

行動そのものに意味があり、結果はオマケに過ぎない。

私は後者だ。

私が軍に入った理由はただ一つ。

復讐――――――。

私の両親を奪い、私の人生をめちゃくちゃにした『物』に復讐をすること。

それが、私の一番の願いだった。

軍に入って一年が過ぎ、仕事にもだいぶ慣れてきた。

「姉さん！」

駆け寄ってきたのは山本昭（あきら）。

私、山本梢の三つ下の弟にして唯一の家族であった。

両親が死んだとき、昭はまだ小学五年生であった。

母親のペンダントをにぎったまま、立ち尽くしていた弟の姿を、私は一生忘れないだろう。

昭も私が入った半年後に軍に入ってきた。

昭が何を考えているのかは、私には分からない。

「どうしたの？昭。」

私は明るくふるまうが、それでも昭が、深刻な顔をしているので、ただ事ではないことに気付く。

「近くで『D』が現れた。」

「うそ・・・」

「いま、戦闘中らしい。どうする、姉さん。」

「もちろん行く！」

「うん・・・・・」

私たちはすぐに準備をして、外に出た。

外は小雨が降っていて、地面は水を吸い、しめっていた。

近くといっても少し遠くらしく、歩くことにした。

ところどころ足跡があり、方角は分かった。

歩いているとき、二人は無言だった。

少しすると、遠くの方で銃声が聞こえた。

いよいよか・・・・・　私は覚悟を決める。

一回、深呼吸。銃をかまえて・・・・

「・・・姉さん」

不意に昭が話しかけてきた。

しかし、独り言ともとれるような弱弱しい、小さな声だった。

「おれ・・・・怖いよ・・・ねえさん・・・・・どうすれば・・・・・」

昭を見ると、銃を持つ手は震(ふる)えていて、呼吸も激しくなっていた。

私は昭の背中を優しくたたいた。

とん、とん、とん、と、赤ん坊を寝かしつけるように優しく・・・・

「大丈夫・・・大丈夫・・・私が昭を守るから・・・大丈夫・・・・・」

こうでもしないと昭の心が壊れてしまうと感じた。

「・・・・大丈夫。ありがとう、姉さん・・・・」

昭は静かに言った。

そのときだった。

爆発音がした。かなり大きな。

「何！？」

私はその方向へ向かった。

そこにいたのは・・・・

「D！」

そう叫んだとき、私に向かって何かが飛んできた。

その何かは幸い私には当たらなかったが、目の前で爆発した。

「・・・・っ！ぐうっ！・・・・・」

衝撃がすさまじく私は吹き飛んだ。

瞬間、息ができなくなる。　体が宙に浮く。

・・・・驚く昭と青い体をした『D』が視界にはいる。

そして、地面に思いっきりたたきつけられた。

一瞬にして意識がとんだ。

＊＊＊

昭が倒れていた。

すぐに近寄る。

しかし、出血が多く、体温は冷たく、生命の輝きを失っていた。

それは梢にもすぐに分かった。

だが、信じられなかった。

昭を抱きかかえ、ゆさぶる。

手を握る。

・・・呼吸を確かめる。

「あ、あ、あ・・・・あああああああああああああああああああああああああ！！！」

涙が止まらない。しかし、雨は容赦(ようしゃ)なく降り注ぐ。

第十四話　「記憶～雨の記憶～」（後書き）

スネ夫「ぼくどうなんの・・・」

ドイル「え？」

スネ夫「レギュラーなのに出番少ない・・・。だいたい何？今回。オリキャラのくせにでしゃばんな。」

ドイル「まぁ、そういうなよ。」

スネ夫「なしてボク出番ない？」

ドイル「名前ちょっと・・・」

スネ夫「？。どゆこと？」

ドイル「スネ夫の『夫』の漢字がさ、どうしても『オ』じゃ出てこないんだよ。」

スネ夫「え？」

ドイル「だからさ、いつも『スネオ』じゃなくて『スネフ』って入力してんだよ。」

スネ夫「あんたのパソコンが悪い！」

ドイル「そうか？」

スネ夫「そうさ！いい？ボクのパソコンは文字も・・・（以下略）」

スネ夫「略すな！」

第十五話　「ロボットの正体」

のび太と梢はパトロールをここまでは順調に済ましていた。

・・・問題があるとすれば、

「いや～今日もいい天気だ。下は荒れているけど、上はいつもきれいだな・・・飛行機飛んでるけど。」

「・・・あの、沖田さん・・一つ聞いていいですか？」

「ん？何、梢君。」

「何でついてきているんですか。」

「ん？まずかったかな？」

「仮にもあなたは一支部の長なんですよ？もっと他にやることがあるでしょうに。」

「いや、『仮にも』って・・・それに暇だし・・・」

「本当に暇なんですか？例えば・・・」

梢はいろいろ話し始めた

のび太にはよく分からなかったが、それが仕事の事であることは分かった。

・・・沖田さんの顔がどんどん青ざめていったからである。

「頼むから、もう止めてくれ。」

涙声になっていた。

「心配だったんだよぅ・・・」

「信用してたんじゃなかんですか！？」

「まぁ、念には念を入れてだな・・・」

「まさか、あなた本当はおもしろそうだからついてきたんじゃ！？」

「うっ！」

「図星か！」

二人が言い争っているのをのび太は黙って聞いていた。

そして、思う。

（想像していたものとちがうなぁ・・・）

どこが、と具体的には言えない。もともとこの想像ものび太が無意識のうちに作り上げていた想像だからだ。

強いて言うならば雰囲気だと思う。

軍というのはもっと何と言うか、カタそうな、怖そうな所だと思っていた。

だけど・・・この二人を見ていると・・・『普通の人間』だ。

そう、どこにでもいるような・・・

そう思い、のび太は笑みをこぼした。

何に対しての笑みだったのか、自分自身よく分からない。

ただ、こういう笑みは無くてはならないものだというのは分かっていた。

一気に緊張の空気が張り付いた。

三人の前に『ＳＩＲ』が現れたのだ。

のび太は恐怖で思わず二、三歩下がった。

なにしろ、本などで梢さんにたたき込まれたから、知ってはいたが、出会うのは初めてだった。

妙にフワフワと浮かんでいる。どうやら一機だけのようだ。

本当にドラえもんはこんな物を・・・・

「ほら、少将が大声だすから・・・」

「大声出していたのは君の方だろう。」

「私に任せてください。」

梢さんが銃をかまえる。

「いや・・・少し待て。」

「？」

「・・・俺がやろう。最近、運動してないし。」

沖田さんが一歩前に出た。

「二人とも、下がってろ。」

梢は諦めて、ため息を一つ付きのび太と少しその場から離れた。

しかし、のび太はあることに気づく。

銃を持っていない。

そんな僕に気づいたのか、梢さんが説明した。

「ああ、少将は銃は使わないよ。というか使えない、かな・・・銃の腕は全くダメで。でもその代わりにあれを使っているの。」

「ああ。」

何というか、納得してしまった。

・・・・名前的に。

沖田さんは日本刀を持っていた。

いつ出したのかは分からなかった。

気付いたら持っていたという感じだ。

そして構えて、

左足で一気に踏み込み、相手との間合をちょうどいい距離にし、

そして、斬った。

刀の刀身が一瞬見えなくなり、それが見えた時には
ロボットは真っ二つに切れていた。

半分はそのまま落ちて停止したが、
なんともう半分はまだ動いていた。

沖田さんはどこからか小太刀を取り出して、すかさずその半分に突き刺した。

ついに動かなくなった。

沖田さんはふう、とため息を一つつき、刀をしまった。

僕はおそるおそる動かなくなった半分に近づいてみた。

驚いたことに、まだ動こうとしていた。
ただ、小太刀が突き刺さっていて、動けないらしい。

すると、何かを見つけた。
動こうとしているロボットに何かがついている。
何だろう？・・・・

ソレをおそるおそる取ってみた。

するとロボットは完全に動かなくなった。

「これって・・・・・」

「?。どうした?」

手に取った物。僕はこれを見たことがあった。

これって確か・・・・

「ロボッター?」

第十六話　「違和感」（前書き）

このごろ忙しくて、ようやく投稿出来ました・・・
長らくお待たせして、申し訳ありません。

第十六話　「違和感」

「せまいですよぅ・・・」

「じゃあもどってみるか？」

『D』が攻めてくる一歩手前で通気孔をけり破り、がむしゃらに中に入った。

通気孔のふたが錆びていて、すぐに開いたのがせめてもの救いだった。

普段の整備を怠っていることに感謝する日が来るとは思わなかった。

通気孔の中を突き進む。

「冗談に決まっているじゃないですか。こんなとこで死にたくないですよ。」

そうだ、こんなとこでしにたくない。

いや、死ぬわけにはいかない。

なんとしてでも生きなければならない。

『生きていてなんになる？』

突如、声が聞こえる。

自分の声。もう一人の自分といってもいい、心の声。

こんな、希望もない、絶望しかないような世界。

無理して生にしがみつくより、いっそ死んでしまった方が楽ではないのか？

こんな、こんな世界だったら・・・・

「明智さん、前、光です。」
大村の声でわれに返る。

前をよく見ると、光がわずかに上から差し込んでいる

よく見ると道もそこから上に伸びている。

「どうやら出れそうだ。こんなところからはさっさとおさらば・・・・」

そういったとき、なにやら背中につめたいものが走る。

「おい、おれらは何階からここに入った？」

「二階ですけど・・・なにか・・・・」

ということはこの上は三階、脱出するどころか「D」に鉢合わせる可能性も高くなる。
しかし、出ないわけにもいかない。

上に手を伸ばすと、通気孔の柵に手がかかる。

そして、外へ・・・・

＊＊＊

＊＊＊＊＊

のび太からロボッターについての説明を聞く。

沖田はとてもありえないと思ったが、あの鉄くずどもが動く理由はそれしかない。

混乱しそうだった。

ＳＦの世界に迷い込んだようだった。

話によると、このような機械がいくつもあるようだ。

どうしたもんか・・・・

こんなものを持っている殺戮ロボットに人間がどう太刀打ちできるのか・・・

いすに腰掛け・・・ふと、あることに気づく。

ある違和感に・・・気づく。

もし、自分が殺人、破壊しか考えない殺戮ロボットで、あのような機械をたくさん持っていたとしたら・・・どうする？

もちろん使うだろう。そう、全部。

なのに「Ｄ」は『ロボッター』しか使っていない。

それは、殺戮ロボットとして矛盾している。

切り札としてとっている？それとも・・・・・

「・・・ふー、なんかいやな予感がするなぁ。」

一人つぶやいてみたが、だからと言ってどうすることもできなかった。

第十七話　「総司令官」

〈元国会議事堂跡・日本軍総司令本部〉

「失礼します、総司令官。」
兵士が部屋に入ってきた。

その目の前には一人の男が座っている。
しかし、実際にはそこには居ない。立体映像であった。
それはここに勤める全員が知っているが、本当はどこに居るかまでは知らなかった。
総司令官の本当の場所を知っているのはほんの数人の要人のみだ。

「・・・何か用か。」
立体映像越しから返事が聞こえる。
本当にはそこには居ない。それはこの兵士もわかっているはずだった。
しかし、理解していなかった。殺気ともとれるような感覚が伝わる。

「は、はい、先ほど０２１支部が壊滅との報告が。これで生き残っている支部は半分もないかと・・・」

「それで？」
「は？」
「それがどううしたというんだ・・・？」

周りの空気が一気に凍りつく。寒気を感じたと思ったら、いつの間にか鳥肌がたつ。
言葉を発することができない。それどころか、呼吸することすら許

されていないような感覚に陥る。

この兵士は、ここにきてようやく理解する。
自分が今ネズミ捕りにかかったネズミと同じようであることを。
立体映像だからよかったものの、そうでなかったら座り込んでいたかもしれない。

沈黙が続く。この沈黙が続けば続くほど、この兵士にとって苦しくなる。
不意に沈黙がやぶられる。

「あ・・・不破(ふわ)中将。」
「＊＊＊＊少尉、何＊＊＊＊てい＊＊」

突如、兵士が倒れる。緊張の糸が切れたのだろう。
しかたなくこのまま置いておく。あとで誰かに運ばせよう。

「かわいそうじゃないですか、総司令官。こんな子いじめて」
「なに、少しからかっただけだ。」
「ひどいことしますなぁ」
「君ほどじゃないさ、それより、なんだ?」
「『D』を発見しました。東京です。」
「ついにきたか・・・で、一番近い支部は?」
「はい、０８９支部です。というか、もう襲われてると思いますけど。」
「ほう、今日で二つか」
「いや、三つになるかもしれません。」
「?」
「０７５支部に近づいています」
「そうか、沖田君のとこへ行ったか・・・で、『Bプラン』はどこ

まで進んでいる？」

「いえ。なにしろ極秘なんでなかなか進みません。まぁ、３０％ってとこです。」

「くれぐれも知られるなよ。」

「分かってます、では、失礼します。」

立体映像が切れる。

「ふう・・・」

総司令官が椅子にもたれる。

傍らにあった箱を取り出す。

「これは本当に・・・すばらしい。」

箱の中身を取り出す。

それは、ロボッターであった。

第十七話　「総司令官」（後書き）

調子乗って総司令官すごい設定にしちゃった・・・

第十八話　「抹殺」

荒れ果てた道を歩く。
ここは０７５支部の近く、いつもと変わらぬ光景。
二人の兵士がのび太たちと交代し、パトロールをしている。
それにしても二人は少しだけ動揺していた。

「・・・・・なぁ」
一人が話しかける。
「何だよ。」

「なんで・・・あの人が居たんだよ」
「・・・さぁ・・・知らねぇよ。」

あの人とは・・・もちろん沖田のことである。
疑問に思うのも無理はない。普通に考えたら警察署の署長がパトロールしているようなものだ。

「ま、沖田さんのことだからなぁ。」
「だな。」
結局、それで片付いてしまった。そしてそのまま、沖田の話題へ・・・
・

「それにしても、考えれば考えるほど変わってるよなぁ。」
「ああ。だがそれがあの人のカリスマ性でもある。あの人は天才だよ。たぶん独裁国家でもあの人がトップなら、下手な民主政治より良いかもしれない。」
「だが独裁政権は長続きしないぞ。」

「へぇ、どうしてそう言いきれる。」

「天才はそう生まれないってことさ。たとえ最初にトップに立った人が天才だとしても、次にトップに立つやつがクズだったら終わりだ。それが独裁政権の弱さだ。独裁の場合、トップの人の頭の良さがそのまま国の頭の良さになっちまう。そして国を一人で平和に治める天才なんてそうはいないんだよ。」

「・・・なるほどなぁ・・・」

「俺は昔、社会の教師だったんだ。歴史や地理を勉強するとおもしろいぞ。」

「あっははは。今度教えてくれよ。俺中学ん時社会が一番できなかったんだ。特に地理がね。」

「そりゃあいいじゃねぇか。多分地理はもうすっかり変わってるぞ。勉強しなおすチャンスだぞ。」

「あっはははははははは・・・・・・！」

その時、異変に気づく。

何かが近づいて来る。とてつもない速さで。

そして、目の前に、現れる。

あの、青い体を持った・・・・あれが・・・

「な、なんだこいつは・・・・！」

一人の兵士が叫ぶ。

この兵士は後悔するべきだ。その、意味のない質問に時間を使ってしまったことに・・・・！

逃げる、『最後のチャンス』をその男はたった今、失った・・・・

「くそっ・・・・ぐがっ」
銃を構えた男が撃とうとした時、その体に無数の鉛球がめり込む。
それで、終わりだった。

「くっ・・・」
もう一人の兵士が銃を放つ。しかし、『D』の前には何の意味も成さない。

そしてその兵士は次の瞬間、光を見た気がした。
それが、最後の瞬間だった。
その瞬間、兵士の頭――――否、上半身が消え去った。
もはや、悲鳴さえ無い。

そして、二つの死体が横たわる。
まるで最初から生命が宿っていないかのようだった。
元からそこにあったかのように、平然と横たわっている。

誰が見ても、それは生物でなく、ただの肉だということが分かる。

『D』ほ興をなくしたのか、二人の死体に見向きもせず、去っていく。

目指す場所は――――――０７５支部。
目的は――――抹殺。

第十八話　「抹殺」（後書き）

またのび太たち出せんかった・・・
次は活躍させる予定です。

第十九話　「覚悟」

支部内に緊張が走る。

〔『D』が襲撃の可能性〕という第一報のすぐ後、〔パトロールの隊員の行方不明。〕

この二つの情報が瞬(またた)く間に０７５支部内に広まった。

支部にいる全員が慌しく動く。

全員、いつも覚悟はしていた。

いつ狙われてもおかしくはない、と。

いつ死んでもおかしくない、と。

多くの兵士が武器を持つ。そのほとんどが銃器だ。

だが、「Ｓ－Ｒ」はともかく、『D』にはほとんど効かない。

それは兵士もよく知っている。

しかし、だからといって、手ぶらで「D」と戦えと・・・？

・・・彼らはもう、すがるしかないのだ。

わずかな可能性。それこそ、奇跡のような可能性でも、可能性がある限りそれに賭け続ける。

最後の最後まで、絶対にあきらめない。

それが沖田の信条いや、０７５支部隊員全員の総意だった。

＊＊＊

のび太は笑顔で言った。

梢は、少し目をそむけた後、のび太を見る。

「？・・・なんですか？」

「のび太君・・・あなたは、非戦闘員と一緒に避難しなさい。」

「え・・・？」

「あなたには・・・まだ、早すぎます・・・・」

「な、なんで・・・僕も戦います。」

「・・・・・ならあなたは死んでもいいの！？。死ぬかもしれないのよ！、殺されるかもしれないのよ！！あなたの友達に！！親友にッ！！！」

「っ・・・！」

のび太は顔を伏せる。

梢は一瞬少し言い過ぎたかと思ったが、すぐに思い直す。

――そう、これで、いいのだ。

戦場ではまだのび太君を完全に守りきれる自信はない。

そう、『あの時』みたいに・・・・・。

だから、いいのだ、これで・・・・

「――――します。」

「・・・え？」

「お、お願いします、ぼくも、連れて行ってください！」

「な、何言ってるの！？私の話を聞いてた！？いつ死んでもおかしくないのよ、あなたにその覚悟はある？」

「・・・確かに・・・ぼくは、臆病者です・・・。死ぬどころか、怪我するのだって怖い。・・・・でも、それでもっ・・・・友達を見捨てて生きるくらいなら、死んだ方がマシだッ！！」

「っ・・・！」

「ぼくは、ここでやらなきゃきっと、一生後悔する・・・・。」

そこでのび太は再び顔を伏せる。・・・涙を浮かべて。

梢は・・・一回大きなため息をつきのび太の頭に手を置く。

「・・・・なんだ。君にも、それなりの覚悟ってのは一応あるのね・・・。責任は、取れないわよ・・・」

「は、はい・・・！」

「じゃあ、準備なさい。あなたの親友を、止めるのよ。」

――――ドラえもん接近まで、あと一時間。

第十九話　「覚悟」（後書き）

ドラ「遅い・・・」
ドイル「すんません・・・」

ドラ「お前二週間おきで連載していたのはどこいった！？」
ドイル「はあ・・・どこいったといわれましても・・・」

ドラ「連載ぶんなげて何やってたんだよ！」
ドイル「諸事情がありまして・・・最近忙しくて・・・」

ドラ「関係無いんだよ、あんたの事情なんて知るか！」

ドイル「ひ、ひどいな・・・。まぁでもどんなに更新が遅くなっても、のびＶＳドラは止める予定は無いので。」

ドラ「何でそんなことが言えるんだよ。」
ドイル「私の名はドイル。いちミステリーファンとして保障するっ！」
ドラ「これ、ＳＦなんだが・・・・」

第二十話　「戦闘」

「――はい、そうですか。はい、分かりました。・・・・・くれぐれも、気をつけてください。」
そう言い、出木杉は無線を切る。

「何でした？」
真壁が尋ねる。

「０７５支部に『Ｄ』が接近しているようだ。」

「・・・・それで、僕たちはどうするんです？」
だいたいは察していたんだろう。特段に驚いた様子はなかった。

「・・・自分の任務を全うしろってさ。」

「了解。」

自分は今、できることをやればいい。
真壁は車を走らせる。０８９支部までもう少しだ。

＊＊＊

悪い夢なら早く覚めてほしい――――と。

人はその身に強大な現実が襲い掛かったとき、無意識にその現実の現実性を疑い、否定し、目を背ける。その強大な現実に押しつぶされないように。

つまり現実逃避とは一種の防衛本能作用によるものでもある。

経験や訓練により多少はそれを抑えることはできるが、完全には無くす事はできない。

その現実が強大であればあるほどに。

しかし、それを訓練してまで抑えようとは誰も思わない。

なぜなら、それはほんの一時の幻想ですぐに救いがたい現実に連れ戻され、突き落とされてしまう。

そして、現実が、やってきた――――。

「来たぞ！」

誰かが叫ぶ。

ここは０７５支部から少し離れた場所。

支部はサッカーで言えばゴールに等しい。

だから、ここで止めなければならない。

戦車や戦闘機も待ちかえる。

ふと、虚空に青い点が。全員に緊張が走る。

梢は戦車に乗っていた。他にはのび太を含め兵士数人。
つい、引き金を引きそうになってしまう。
いけない、それでは何の意味もない。
戦車一発の威力では倒すこともできないし、第一簡単によけられてしまう。
それではだめだ。
もっと引きつける。
もうすこし・・・・・もうすぐだ・・・・。
『今だ。総員、撃てぇ！』
無線から、合図が。
その合図と同時に、全員が引き金を、引く。
どんどん大きくなっていた青い姿が爆炎と煙で見えなくなる。
それでもなお、どこも砲撃を止めない。
これぞまさしく、集中砲火であった。
戦車内でのび太は今は目をつむるしかなかった。
爆音で耳がどうにかなりそうだった。
しかし、目をつむったのは違う理由のためだ。

自分は何を願う？

このまま、ドラえもんが叩きのめされることか？
それとも、みんなが叩きのめされることか？

のび太はまだ選ぶことが出来ない。

それを選び、望むことはどちらかを切り捨てることに等しいから。
・・・・だからのび太は爆音によってそのことを忘れようとした。

砲撃は数十秒で止んだ。
土煙が立ち込める。

これで打ち倒したか――――？
答えは否だった

土煙がおさまりかけ、青い体が見え始める。

沖田はもちろんこれで倒せるとも思っていなかった。
これで倒せていたら、もう何年も前に倒している。

しかし、動きを一時、止めておくことは出来ると思った。

そして実際、砲撃の間は動きが止まった。
シールドで身を守っているのかは知らない。

ただ沖田は時間が欲しかったのだ。
戦車や戦闘機を後ろに回りこませる時間が！

そして何台かの戦車、戦闘機がドラえもんの後ろに回りこんだ。
しかも爆音によりドラえもんはそのことに気づかない。
宙を浮いているから戦車にも気づかない！
まさか、宙を浮いていることを悔いる時があるとは、ドラえもんは思うだろうか・・・

これでドラえもんを囲む形になる。

「よし、撃て！」

またも集中砲火。ただ一つ違うのは今度はドラえもん全体でなく、ドラえもんのある一点に集中させた。

ただ全体に撃つよりも一点に集中させ、威力を一点に集めさせる。
さらに後ろにいる戦闘機はその集中させているちょうど裏側を狙い、撃つ。

これにより後ろに流れるはずだった力が後ろに逃げられなくなる。
つまり、普通の攻撃よりも破壊力が数倍に跳ね上がる！

これが、今の支部に出来る、最大の攻撃。

爆風による土煙により辺りは見えなくなる。

「なっ・・・！」

煙が晴れる。

無傷だった。
いや、あれをまともに食らって無傷でいられるはずがない、全員がその思考にたどり着く。
ならばなぜ・・・？
そして、理解する。
まともに食らっていなかったとしたら・・・？
すんでのところで避け、そのまま土煙に身を隠していたとしたら・・・
もちろん沖田も避けられる可能性も考え、その対処も考えていた。
だが、それで考えていたのは大きく避け、反撃してきた場合だ。
まさか、小さく避け、攻撃をやり過ごすことに集中するなんて・・・
そんな思考があの殺戮兵器にあるなんて、いや、実際に前までなかった。
そう・・・成長したのだ。
最も恐るべき成長は身体や性能などでなく、思考の成長。
それを痛感した。
ドラえもんが瞬時に身を翻す。
「まずい！！」
沖田がそれを発するときには、もう遅かった。

後ろの、戦闘機が瞬時に破壊される。

さっきまで、戦闘機だったもの、そして生命が宿っていたものが炎を交えて燃え落ちる。

まるで、舞い落ちる桜の花のように。

そこまで粉々にされていた。

そしてそれは、形成が逆転したのろしとなった。

第二十一話　「Bプラン」

戦術において、あらかじめ立ち位置を決め、陣を組むのは作戦の初歩でありながら、一番効果的な方法だ。
これは戦いだけでなくスポーツなどあらゆるところで活用されている。

しかし、予想外のことが起こり、一度、どこか一部でも体勢がくずれたら、それを立て直すのは難しい。
関ヶ原の戦いで、一部の裏切りによって敗れた石田三成らのように。
だがそれはあくまで予想外の出来事だった場合だ。
一部の体勢がくずれるのは予想はできていた。
だが、あの攻撃で全くの無傷というのは予想外だった。

いや・・・ちがうな。
そう思い沖田は自嘲し、思い直す。
予想できなかったんじゃない・・・・予想したくなかったのだ。
この周りの兵器のほとんど全てによる集中砲火。これ以上の攻撃力はない。
・・・だがこれで無傷・・・・はは っ、これはつんだな・・・・。

これ以上、どうしろってんだよ。
予想外の事態じゃない・・・最悪の事態、それでいて最も考えられた事態じゃないかよ・・・

だが、あきらめた時点で、完全に負けだ。

おそらく今回は勝ちはない。だが、引き分けには持ち込めるかもしれない。

自分は、最後まで戦わなくてはならない。

だがその相手は、ドラえもんではない。
自分自身、そして、・・・・部下全員とだ。

仮にも一つの支部を任されている。
一つの支部を任されているというのはそのままその支部にいる全員の命を任されていると同じことだ。

そう、部下全員の、命・・・・。

これを『少しでも多く』護ることができるのなら・・・・。

おれは、鬼にでもなんでもなろう・・・・

沖田はおもむろに無線機を取り出す。
そして、全員に通知する。

『・・・・・全員、聞こえるか？・・・・・作戦は、まぁ、思ったとおり・・・失敗だな・・・。よって、Bプランの発動を命ずる。全員、・・・・行動開始しろッ・・・・・・！』

＊＊＊

「ちょっといいですかい？」

「？。なんですか・・・・ぐっ！！！」

瞬時。男はのび太の下腹部を殴りつけ、意識を刈り取った。

「ちょっと、何やってるの！？」

「・・・・おっと、すいません・・・・・・・手が滑っちまいました。」

そういい、のび太を寝かすスペースがないためそのまま座らせる形にした。

「あ、あなたって人は・・・・・・」

そう梢がいうと、男はにっと軽く笑う。

「・・・・だからあなたが話した方がいいって言ったんですよ。」

＊＊＊

あれから、数機の戦闘機、戦車が破壊された。

もうためらう時間はない。このままでは、全滅する。

そして、Bプランに取り掛かった。

もしドラえもんに思考があったのなら、この光景をどう思うだろうか。

今までドラえもんを取り囲むような形に位置していたが、急遽（きゅうきょ）、その形が変わった。

・・・・・・二手に、分かれたのだ。

いや、正確には、7対3ぐらいの割合で、完全に逆の方向に分かれている。

しかも多い方はただ移動しているだけだが、少ない方はドラえもんに攻撃しながら移動していた。

沖田からの指示は、二種類。

一方、多い方には『絶対に生きて、逃げ延びること。』
そして少ない方には、『ひきつけて、できる限り時間を稼ぐこと。』

ドラえもんは攻撃をしている方に向かう。全て沖田の計画通りだ。

小を捨て、大を生かす。

これが全員が出した答えだった。

そして全員の・・・・・覚悟の上に成り立つものだった。

第二十一話　「Bプラン」（後書き）

ドイル「主人公（のび太）が出せん。」

ドラ「どうして？」

ドイル「いや、リアリティーを出そうと・・・」

ドラ「そんなとこでリアリティーだそうとスンナ！」

第二十二話　「人生なんてこんなもの」

――――3時間前（ドラえもん襲撃の2時間15分前

――――――というわけだ。
沖田は全ての作戦を話す。

「確かに、この攻撃が効かなければ、おそらく、今の我々に勝ち目はないでしょう。」
一人の兵士が言う。

全員がそのとおりだと言うようにうなずく。

二手に分かれての囮作戦。
依存がある者はいないようだった。

「・・・・・・・・だれがいく？」

また、一人の兵士が言う。

一瞬、全員が沈黙する。

だれもが触れたくない、しかし必ず解決しないといけない問題だった。

沖田が口を開く。

「それは・・・・」

もちろん自分はおとりになる、と言おうとした。
だが、隊員が口を挟んだ。
「そりゃあもちろん、支部長はおとり部隊からはずれるでしょう。」
「は・・・？何を言ってるんだ！」
「何を言ってるんだ、は支部長の方です。」
またもう一人の隊員が口を開く。
「あなたはリーダーなんですよ、リーダーは全責任を持たなきゃなりません。」
「だから・・・！」
「今回の作戦の責任の取り方は、死ぬことじゃありません。」
「っ・・・！」
「あなたは、残ったものを一人でも多く生かすこと、それがあなたの仕事であり、責任の取り方です。」
沖田は言葉を失う。
そしてしばらくうつむいたあと、顔を上げた。
「・・・・・勝手にしろっ！・・・・・・・・メンバーが決まったら、俺のところに知らせに来い、俺は、部屋に戻る。」

そういって、会議室から出て行った。

「お～こわっ。」

誰かが感想を言う。

「さて、と。どうやって決める？」

「う～ん。なんでもいいじゃないスか。」

「う～ん、まぁ、じゃあトランプでブラックジャックでもして決めますかイカサマなし。真剣勝負だ。」

「意義な～し。」

「・・・なんか、こんな簡単に決めていいんスかね。」

「・・・まぁ、人生、こんなもんだろ。」

そういって、まるで昼休みでのゲームのように、おとり部隊を決めた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊＊

戦車内。

沖田は一枚の紙を見ていた。

もう、ドラえもんの姿は見えない。

そしてもちろん、彼らの姿も・・・・・・

「沖田さん。」

不意に、声をかけられる。

「なに？」

「この近くに、緊急用の地下施設があります。そこで救援を呼びましょう。

「ああ、そうだな。」

「あの・・・大丈夫ですか？」

様子からか、隊員がかなり心配そうな表情で聞く。

「・・・ああ、大丈夫だ。」

そうは言ったものの、本当に大丈夫なのか、それは自身にも分からなかった。

だが、自分はこの十字架を一生背負わなければならない。

沖田は再び、目の前の紙を見る。

そこに書かれているのは、おとり部隊のメンバー一人一人の名前。

「・・・・じゃあな。」

そういって、沖田は紙を折りたたみ、ポケットにしまいこんだ。

第二十二話　「人生なんてこんなもの」（後書き）

今回は、少し短いかな・・・・

「これもまた人生」という作品もよろしくおねがいします。

第二十三話　「サクリファイス」

死とはなんだろうと常々思う。
それは死に直面しているときでも、どうやら分かることはできないようだ。

もしかしたら、まだ心から、死に直面していると実感していないのかもしれない。
いや、実感していないのではなく、否定しているのかもしてない。
だが、心臓の方は正直だ。さっきから、これほどまでにないくらい速く、そして大きく鼓動している。
初恋の告白時にもここまで激しく鼓動していなかっただろう。

あれ、初恋の相手ってだれだっけ・・・・・・？

戦闘機に乗っていながら、こんなくだらないことを考えている。
さっきまで十数機ほどあった仲間も今は二、三機ほどしかない。
次は自分かもしれない。
直面しつつある、死。

おそらく数分後には迎え入れているだろう。

「・・・ったく、あそこでもう一枚引いてなければなぁ」
思い出されるのは、この前のブラックジャック。

六以下が出れば勝てたのに、引いた数は十。

あの時はついていなかったなぁと悔やんでも悔やみきれない。

・・・・そういえば最後に引いたのって、スペードの十だったな。

スペード。
なるほど、ふさわしいと思った。

ダイヤ、クローバーなど、トランプの柄にはそれぞれ種類がある。

ダイヤはお金。
ハートは愛。
クローバーは幸福。
そしてスペードは、死。

ああ、あのカードは死神のカードだったんだなと思う。

なぜ自分だったのか。
一歩違えば、まったく違う人物がこの役をやっていた。

そう考えるとキリがないのは知っている。
だが、どうしても考えてしまうのは、人間の弱さでもあり、また強さでもある。

すると、一つのわずかな衝撃音。

あたりを見渡しても、仲間はどこにもいなかった。
代わりにいるのは、青い・・・・・・。

「ちっ、俺が最後かよ・・・・」

突如、戦闘機が傾く。

うまく操縦が出来ない、腕の震えが、止まらない・・・・・・！

いままでは、次は自分『かもしれない』だった。

だが、次は『絶対』自分なのだ。

ようやく実感した、死期。

死期を悟った、なんて生易しいものではない。

それは、恐怖。絶対的な未知のものに対する恐怖であった。

こんなもの、覚悟なんかではどうにもならない。

ちくしょう、自分は、こんなにも弱い人間だったのか・・・・？

こんな・・・・・・こんなっ・・・・！

兵士は徐(おもむろ)に銃を取り出し・・・・・

そして・・・・・

一つの銃声が鳴り響いた。

彼は・・・・・・・自分の足を撃ち抜いた。

即座に激痛が走る。
だがその痛みは、彼から恐怖を忘れさせた。
「ちくしょう、このまま・・・このままこんな悔しい重いで死ねるかってんだ。」
そうだ、スペードは、『死』という意味の前に、『剣』がモチーフになっている。
『剣』という意味もあるのだ。
ははは、いいぜ。剣になってやる。
彼は戦闘機の向きを変える。
その方向の先には、ドラえもんがいる。
ドラえもんと直面する形になる！
ドラえもんはかまわず直進してくる。
彼も、迷わずドラえもんへと直進する。
「剣っていうのはな・・・・・相手に突き刺すもんだ！！！」
「はははははははははははははは！！！」
そして一つの剣が、折れた。

＊＊＊＊＊＊

そこにある全てを破壊し終えたあと、ドラえもんは、ある方角をじっと見つめる。

その方角は、のび太たちが逃げた方角。

だが三十秒ぐらい見つめた後、ドラえもんはちょうどその反対側の方角へと、飛んでいった。

彼が何を思っていたのか、それが分かる者はまだ、誰もいないだろう・・・・

もし、のび太がこの行動を見ていれば、何かが変わっただろうか・・・

いや、おそらく何も変わらない。

そう、何も・・・・・

第二十四話　「司令官の企み」

「ドラえもん！」

のび太はいつものようにドラえもんに寄り添う。

大体この時点で何を要求してくるかドラえもんは解っているためか、そっぽを向き、ドラヤキを食べている。

この反応に、のび太は一層声を荒げ、懇願する。

そう、これはいつもの光景。

泡沫の如く消え去ることになった、なにげない光景。

ふと、目を覚ます。

目の前には白い天井が見える。

あれ・・・？ここ、どこ・・・？

「目が覚めましたかい？」

不意に声をかけられる。

横を見たら、梢さんともう一人、男の人が。

え、と・・・確か一緒に戦車に乗ってた人・・・・って僕、この人に殴られなかったっけ？
あれ？っていうか、戦いはどうなったの？ここ、どこ・・・・？
のび太の頭が混乱しかけていることに気づいたのか、その男が口を開いた。
「あ～。もしかして、混乱してますか？」
「えっと・・・あなたは？」
「ああ。そういえば自己紹介がまだでしたか。自分は近藤（こんどう）　啓（はじめ）。よろしくです。」
「えっと・・・確かあなたに殴られた気が・・・」
「え～。気のせいですよ、あなたは戦車が揺れた時、頭打って気絶したんですぜ。」
「あれぇ！？・・・・・・そうだっけかなぁ・・・・」
「まぁ、混乱するのも無理ありませんって。いろいろばたばたしましたからねぇ・・・。」
「そう・・・かなぁ・・・あ、それよりも、どうなったんですか？戦いの方は・・・」
「・・・・・」

「あのね、のび太君・・・」
「いや～そのことですかい。」
梢の言葉を近藤がさえぎる。そして、続ける・・・
「あのあと、命からがらですが、『ほぼ全員無事に逃げ切ることができたんですよ。』まぁ、不幸中の幸いってとこですかねぇ・・・ここは日本軍総司令本部です。」
「そう・・・ですか・・・」
「おっと、もうこんな時間だ・・・まぁ、のび太君も起きたことですし、私たちも一回戻りましょう。ね、梢さん。」
「・・・・・・ええ、そうね。じゃあ、またね、のび太君。何かあったらその隣のボタンを押して。人が来るから。」
「あ、はい。分かりました。」
のび太が横を見ると、確かにナースコールと思われるボタンがあった。そしてその上にはデジタル時計があり、夜の十一時を指していた。
「・・・もう、十一時なんですね。」
「ええ、そうよ。ここは時間の感覚を忘れるからね。」
「そういえば、窓がないですね。」
のび太がふと見回す。あたりに窓はなく、牢獄のようにも少し覚えた。

「ああ・・・まぁ仕方ないわね。ここは地下だもの。」
「へ？。地下？」
「そう。ここの上は国会議事堂があった場所でね・・・ずった前から『議事堂の地下には何かがある』って感じの都市伝説もあったけどあれは本当なの。」
「へぇ、なんでそんなものが・・・？」
「ここから先は歴史のお勉強になっちゃうけど？」
「遠慮します。」
それを聞くと梢はクスリと微笑んだ。
のび太がその微笑の意味を知るのはもう少し先の話だ。
「それじゃあ、行くけど、電気は消しとく？」
「あ、じゃあお願いします。」
「そう。じゃあ、おやすみ。」
「おやすみなさい、のび太君。」
「おやすみなさい。」
そう言葉を交わすと、二人は部屋から出た。
「・・・・あれで、いいですよね。」
部屋を出てから、近藤が梢に静かに語りかける。

「・・・・・ええ、そうよね、・・・・・知る必要は、ないよね・・・・」

今回の件でどれくらいの犠牲者が出たか、それを馬鹿正直に話しても、何もならない。

人は皆、真実を知りたいと願う。
だが、時に真実は、恐ろしい刃物となるのだ。
取り扱いに気をつけないと、人の心がたやすく切られる。

だから、世の中には嘘がある・・・・
か弱い人を守る、優しい嘘が・・・

＊＊＊

「・・・で、何ですか？用事って・・・報告なら先ほど致しましたが・・・」

「ああ、うん。そのことについてだが、君にはある作戦に協力してもらいたくてね。」

「協力？」

「まぁ名付けて『Bプラン』というのだが。」
これを聞いて沖田は、心の奥に冷たく突き刺さる感覚を覚えた。

「・・・・へぇ、『初耳』ですね。どういう内容です？」

「・・・うん。『初耳』か。・・・・まぁいい、内容はほら、そこにおいてある。」

総司令官が指を指した方向を見ると、そこには一冊の冊子が。

「・・・・・拝見します。」

その冊子を読み始める。
だが、数ページ読んだとき、沖田はこの冊子を床に落とす。

「な、何ですか！この計画！？ありえない！！」

「え～どこが？完璧じゃん。」

「・・・これは、あなたが・・・・・・？」

「そう。いいでしょ。」

「どこが！！！」

沖田が落とした冊子――――――その一ページ目にはこうかかれていた。

『総司令部、及び多少の人員を囮にしての、集中核攻撃について』

第二十五話　「陰謀の正義」

「こんなこと、許されるはずがない！」

それが率直な感想であり、とっさに出た言葉であった。

「おいおい、もっと冷静にならないか、君らしくない・・・質問があるのかな？」

そう言い、モニター越しに不敵な笑みをこぼす。

まるで、この沖田の反応を見て楽しんでいるよう・・・・いや、実際に楽しんでいた。

沖田もそう感じ、落ち着きを取り戻すよう努める。

「これは、どういうことで・・・？」

「そのまんまの通りさ。」

「っ！・・・日本は、非核三原則により、核の軍事使用はしないと・・・」

「あくまで『原則』だ。これからは、臨機応変に対応していかないとね・・・」

「それは、ルール違反ではないですか？」

「斬新さ、新しさ、新たな突破口はいつのときもルールを多少無視したところから生まれてくるものだよ。」

「・・・・こんなこと、できるはずがない。」

「できるはずがないィ？倫理の点か？、それとも環境での点か？」

「・・・どちらもです。特にDによって、環境はギリギリまで荒廃していています。あなたはそれに止(とど)めを刺すつもりですか！？」

「くっくくく。だがこのままでは、どっちにしろDに滅ぼされて終わりだぞ。」

「くっ・・・しかし、この総司令部と多少の人員って・・・！どういうことです。」

「ああ、安心しろよ。訳あって総司令部でなく、別な場所でやることにした。」

「別な・・・場所・・・？」

「ああ。」

「一体、どこで・・・？」

「それは君の支部からも近くて、ここからも近いところさ。」

沖田は思い当たるところが一つあった。

「な！？それって・・・！」

総司令官が笑みをこぼす。

それは正直言って、天使の微笑みのような笑みとは全くの対極にあ

るものだった。

「・・・そう、０８９支部さ・・・・・・」

沖田は即座に反論する。

「ちょっと待ってください、０８９支部はすでに壊滅しています。もう一度Ｄ　がくる可能性は低いのでは？」

「ああ・・・そのことだがな、これを使う。」

そう言って、総司令官はある物を見せる。

沖田はそれに見覚えがあった。

「Ｓ－Ｒ」についていた、たしか「ロボッター」という名前だっただろうか。

「それは・・・・」

「君も見つけたはずだ。「Ｓ－Ｒ」の中枢部分だ。これを調べると、ある一定の周波数が発せられていることが分かった。これを解析し、応用すると、Ｄを引き付けることができる。」

「できる、って断定ってことは、あなたまさか・・・最近の襲撃は・・・」

沖田がそういうと、見抜かれたと悟って、再び笑い始めた。

「くっくくく・・・お見事。ま、実験ってことでね。」

「あなたの実験で、一体何人の人が死んだと・・・」

「いまさらお前が何ほざいてんだよォ！！小を捨てて大を生かすのは当然じゃねぇか！お前だって、今回それで生き延びたんだろぉ？いや！、今回だけじゃない。お前は、いや人間は、そうやって生き延びてくもんなんだよォ！！」

・・・・・・・何も言い返せない。

許されるならば、『それは間違っている』と大声で怒鳴り散らしたい。

だが、それはできない・・・そうする権利は自分にはない。

自分もすでに、『同じ穴のムジナ』なのだから。

「ああ、あと一つ教えておこう。」

「？。」

「実はな、Ｄを引き付けるには、０８９支部で誰かがスイッチを入れなければならない。」

この情報自体、特に変わったことはない。

だが、このことから沖田は一つの推理にたどり着き、総司令官もそれを狙っていた。

「それは・・・つまり・・・」

「そう、つまりスイッチを押す人がいなければならない。つまりは『君が調査に行かせた隊員の中にこちら側の人間がいる』ということだよ。」

第二十六話　「時間的矛盾」

「あの中に、この作戦を知っている人がいるんですか？」

「そう。」

その発言、断定に沖田は言葉を失う。

すると総司令官がやれやれといったようにため息混じりに言う。

「君って、意外と臆病者で、引きずるタイプだもんねぇ。まだ、『あの事件』のことを気にしてるのか。」

「くっ・・・」

「君は本来、誰よりも臆病な人間だ。だけどそれを演技で覆い隠してる。立派な主演男優賞ものだよ。」

総司令官がくすくすと笑う反面、沖田の顔には、少しずつ苦渋の表情がにじみ出る。

「ほらほら、どうしたんだぁ？思い出しちゃったか？」

「・・・・・私はいままで一度も、忘れたことなんてありませんよ。」

「へぇ、それは失礼。てっきり記憶に蓋をすることによってこれまで人格を保ってきたと思ったのだが。」

「あっはははは。それは私を買いかぶりすぎですよ。私はそこま

でかしこい人間ではありません。・・・・っとそれよりも、総司令官ってなんか呼びづらいですね。名前をつけてよんでもいいですか？」

「なに・・・？」

「私は、『あなたの正体に察しがついている』ということですよ。」

＊＊＊

「それについて話したいから、ちょっとついてきてくれる？」

「？。ここじゃだめなんですか？」

「・・・いいから。ついてきて。」

「は、はい・・・」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

リルルにつれてこられた場所、そこは古い倉庫の裏の様だった。

「おい！のび太！」

「ひさしぶり、のび太さん。」

「静香ちゃん、スネ夫！どうしてここに。」

「ぼくらもリルルに連れてこられたんだよ。」

『よー。これで向こうにいる剛田　武以外は全員揃ったな。』

「「「！！！」」」

「え！？だれ・・・！」

突然の見知らぬ声。リルルが落ち着いた声で答える。

「大丈夫よ、のび太君、多分、その辺りにいるから。」
そう言って指先からレーザーを発して倉庫の隅にある小さい荷物にぶつける。
荷物にぶつかる直前に何か小さい塊が箱の中から飛び出す。
荷物には小さな穴が開いて、そこから煙が出る。
『うはーあぶねっ！！なにしやがんだテメー。』
「隠れて驚かす方が悪いでしょ。」
リルルが言い放った先には・・・・一匹のネズミがいた。
灰色の毛に覆われて、少し細い。
「・・・・・ネズミ？」
『あー。いかにも、ネズミだぜ。』
「なんでしゃべってるの？」
そう言ったスネ夫にネズミは少しむっとして言う。
『ああ？ネズミが言葉しゃべっちゃだめなのか？お前だってキツネなのにしゃべってるじゃねーか。』
「なっ・・！ぼくは人間だーっ！」
そういって捕まえようとするスネ夫をネズミは笑いながらひらりとかわす。

「いいかげんにしなさい、チル。」

『ちっ、お遊びもここまでにしとこうか。では改めて。はじめまして、イレギュラーの皆さん。といっても、俺たちもイレギュラーか。くっくっくっ』

「あ、あの・・・言ってることがよく分からないのですが。」

『可愛い子に尋ねられたら答えるしかねーな。リルルのことは後でいーか。一つ一つ説明してやる。』

「お、お願いします・・・。」

『俺はチル。22世紀の、ネズミ型ロボットだ。』

「「「に、二十二世紀の・・・・！」」」

『そうだ。とはいっても、俺らの世界での、二十二世紀だけどな。』

「？。・・・どういうこと、チル。」

『おいおい、メガネボーズ。呼び捨てにすんな。チル様と言え。』

「・・・ごめんなさい、チルさん」

『さん、か・・・まぁいいか。で、話を戻すぜ。まずは初歩の初歩から教えねーとな。お前ら、パラレルワールドって知ってるか？』

「はい。」

のび太はこれまでのことを思い出す。パラレルワールド。ドラえもんから何回か話を聞いたことがあった。

『知っているなら話は早い。簡単にいうと違う未来で世界がいくつも存在するって話だ。Ａを選んだ場合の世界とＢを選んだ場合の世界っていう風にだ。・・・・だが正確にはそれは間違いだ。』

「え？」

『時間は常に唯一性を保とうとする。時間を一つの生物と考えてもいい。おっと・・・もっと簡単に言う。ここにＡとＢの箱があったとする。このうちどちらかだけを開けていいといわれたとき、さっきのパラレルワールドの概念だとここから世界がもしもの数だけ存在するということになるだろ？』

「・・・・うん。」

ここまで、何とか理解できている、ドラえもんに教えてもらったからだろうか。

『だが実際はそうじゃねー。Ａの箱を選んだとしたらそれ以外の世界なんて存在しない。』

「どうして・・・？」

『言葉にして言えば、さっき言ったように時間は常に唯一性を保とうとするとしかいえねーが、ざっくり言うとお前が気分でどちらかを選ぶとするだろ？すると過去も当然全く同じ気分のはずだ。だから、選ぶ瞬間まで適当だったとしても選んだ時点で意図的になるといえる。まぁつまり、パラレルワールドなんざ、ほとんど無いんだ

よ。ある条件を除いて、な。』

「ある条件・・・？」

『タイムトラベルだ。』

「た、タイムトラベル！？」

『ああ。お前ら、不思議に思わなかったのか？ドラえもんは二十二世紀のロボットだろ？今の時代をこんなにめちゃくちゃにして、本当に未来で作られると思ってんのか？』

「「「！？」」」

『結論から言う。二十二世紀にドラえもんは作られない。精神面からでも、技術面からでもな。』

「技術面？」

「ドラえもんの襲撃によって経済、科学技術などが大打撃を受けたの。」

『そういうこった。だが、ドラえもんが生まれないとなると今回の惨劇は起きない。惨劇が起きないとドラえもんが生まれて惨劇が起きる。』

「え？それって・・・」

『俗に言う、タイムパラドックスってやつだ。時間的矛盾。そういった矛盾を消すときのみ、パラレルワールドが存在する。』

「よく、分かりません・・・」

『簡単に言うと、ドラえもんが作られる世界を1とするとこの世界は2だな。そしてこの世界は1の世界の上に成り立ってんだよ。』

「は、はぁ・・・」

正直、のび太にはよく理解ができなかった。

それを察したのか、チルが笑う。

『まぁ、これは理屈だ。別に理解しなくてもいい。問題はこっから。』

「何、ですか・・・」

『テメーらに、ある計画を阻止してもらう。』

第二十七話　「罪」

『テメーらには、ある計画を阻止してもらう。』

「ある・・・計画。」

『ああ。本来ならば中止になるはずだった計画だ。』

「え？それがなぜ中止にならなかったの？」

『頭の回転が遅いな、メガネ君。』

「なっ・・・！」

のび太が反論しかけたとき、静香が口を開いた。

「わたしたちの・・・せい・・？」

「えっ・・・、どういうこと！？」

『そのとーりだ。時空のいたずらでここに来たお前らが、未来を変えた。』

「で、でもさっき、パラレルワールドはないって言ったじゃないか。そう考えると、僕らがこの時代に来たのは必然で、僕らがここに来たということだけでは未来は変わらないはずだよ。」

『あー。面倒な話だから簡単に説明する。お前らが普段暮らしている空間とタイムスリップ時に渡るあの空間とでは時空間のレベルが

違う。さっき時間を生物ととらえるよう言ったがあの空間はそれ以上の存在というべきか、全く異なる生物というべきか。」

「時間以上の、存在・・・？」

『まーとりあえず、お前らは未来を変えたんだよ。』

「逃げた・・・」
リルルがつぶやく。

『うるせー！』

口調からして怒っているようにも聞こえるが、そのネズミという風貌の所為か、大して怖くない、むしろ可愛らしい。

「未来を変えたって・・・具体的にどのようなことを変えたんですか？」
「そ、そうだ。それを教えろよ、チル。」

『ったくそれが人に教えを請う態度か？・・・まぁいい、埒が明かない。お前らがここに来たせいで、いや、おかげで、というべきか・・・？。死ぬはずだった男が生き延びた。』

「え！？それって、誰のこと・・・・？」

チルは、少し笑って言う。
『出来杉という、中佐の男だ。』

その内容に、のび太たちは耳を疑う。

「え・・・！そんな、出来杉君が・・・？」
「うそ・・・」
「ほんとなのかよ！」
『あれ、知り合いだったか？』
「・・・友達よ。彼らの。」
リルルが説明する。
『おお、そうだったか。』
「出来杉君を僕たちが助けたの？」
『結果的に、そうなったって話だ。偶然お前らがここに来たことで、彼の運命が変わった。』
のび太はあの日のことを思い出した。
たしか、十年後の未来に途方にくれて、そのまま廃墟の方へいって、そこで出来杉と会った。
『出来杉はあの時、お前らと会ったため、本来の任務の監視を早めに切り上げて本部に帰った。だが本来は、お前らが来なかったら、当然、任務を続ける。しかしその先でドラえもんと出会い、死ぬはずだった。』
「そんな・・・」
『そのかわり、翌日、違う二人の兵士が犠牲になった。』

のび太は思い出す。そういえばあの時、出来杉以外にもう一人、兵士がいた。
あの兵士も犠牲になるはずだったのだろうか・・・

「だ、だけど、そのことと、そのある計画を止めることに、一体何の関係が？」

『関係大アリさ。出来杉はその計画の重要な役目を任されている。本来ならば、出来杉の死亡により計画そのものが頓挫することになる。だが・・・知っての通り出来杉は死んでいない、このままじゃ、計画が遂行される。』

「そ、そうなると、どうなるんだよ・・・」

『・・・・さあな。なんせ俺の未来では起こってないことだ。予測こそできるが・・・断言はできない。』

「じゃあなんで、・・・止めさせるの？」

『さっき言ったろ、時間はできるかぎり統一性を保とうとする。未来が変わるんだ。俺たちの未来が消える可能性が出てくる。なぜ、人って死ぬのが怖いと思うか分かるか？それは誰もまだ一回も死んでないからだ。何も知らないというのは幸せだ。ただ、中途半端な知は恐怖を与えるもんだ。つまりな、俺たちは、消えたく、ない。』

そうか、とのび太は思った。

確かにここでドラえもんを倒したら、未来は少しは元通りになるかもしれない。ただ、彼らはどうなるのだ？

つらい、荒廃した世界に耐えながら、それでも必死で人生を積み重ねてきた、彼ら。

それが全て、『なかったこと』になるのだ。まるで今までの人生全てが否定されるかのように。

そしてのび太には、どれが正しいのかも分からない。

『勝手だと思うだろ？・・・俺もそう思う。勝手に未来から干渉して、俺らが消えないように予定通りのレールの上を歩かせる。こんなことは本来、許されない。』

許されない？なら僕はどうなのか

もし、この行為が本当に許されないのだとしたら、僕は一体、どれだけ許されないことをしたのだろう。

そう、全てはのび太とドラえもんがはじめて出会った、あの日。

この行為が罪だとしたら、のび太の罪は、あの日から始まった。

あの日のび太は、自分の未来を見て、それを否定した。

未来を自分の意思で変えること自体、罪ではない。

だとしたら、変えられる未来が自分を責めるのもまた、罪ではないのだ。

「チルとリルルは、まちがっていない。」

のび太が口を開く。

「「！？」」

「だけどいくつか聞きたい。・・・本当のことを話して。今回の出来杉の作戦で、ドラえもんは、止められる？」

『俺が思うに・・・おそらく無理だと思う。』

「じゃあ最後に、君の未来では、ドラえもんはどうなった？」

『・・・・悪いな。それは教えられない。』

「・・・・・そう・・・・・。でもとりあえず、出来杉を止めないといけないということは分かった。」

『分かればいい。俺も、最大限のサポートはするぜ。』

チルはニッと笑った。

＊＊

「ったく！いつまでかかんだよ！」

結局、道中で野宿となったことにジャイアンは悪態をつく。

「ごめんね、剛君。近くにドラえもんが現れたというから、遠回りして、警戒しながらゆっくりと進んでたんだ。」

「なに！？なんでもっとはやく教えてくれないんだ。」

「いや、後部座席でぐっすり寝てたから・・・」

「くっそー。今すぐ探しに行こうぜ。」

「それは止めた方がいい、剛君。」

「あ！？どうしてだよ、出来杉。」

「この人数に武器も少ない、間違いなく全滅さ。」

「う・・・わかったよ！」

「うん、今は会ってはまずい。・・・・・・・今は、ね・・・・・・・・・・・・・」

このときの出来杉の不敵な笑みに気づく者はいなかった・・・。

第二十七話　「罪」（後書き）

すいません、更新が遅いと思われる方も多いと思います。
実生活の方もようやく軌道に乗ったかな？というところです。

さて、長らく更新停止してたわけですが・・・・
いつの間にやら、アクセス数九万五千越え、総合評価も九十点越えと、
自分でも驚いております。

こんな更新も遅い小説を応戦してくださり、本当にありがとうございます。

まだまだ拙い描写ではございますが、完結まで、あと少し頑張ろうと思います。

これからも、のびドラをよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4242i/

のび太vsドラえもん

2011年9月16日20時21分発行